

わたくしア色ど土用干はいつにしたことがおつせんいろといふものはどんなものだへこの  
 井戸からわきんすねへ 柳井戸からはわかぬへがその下からわく虫よ。こいつにひよつとた  
 かられると女郎衆も志めへだまづ二朱一步の小金から喰ひはじめて櫛笄から着物をつくひそれか  
 ら髪をくひきり小指をくひだんく臓腑へくひこんでいろくな氣をださせとらく命をとり  
 おはんぬなんぼうおそろしき物がたりにて候。さこれをなづけて死々心中の虫といふはなこい  
 つをよけるにやア鍋屋のうは氣うせぐすりといふがあるおめへがたもちつと用心に志めなせへ  
 梅ぬしも女郎衆にほれられなんすから其虫の部だね 柳おきやアがれみなヲホ、ハ、ハ、ハ、  
 トわらふ 浮たんどおしやべんなんしト出てゆ 梅ぬしやアなせそねへに廊下鴛を志なんすへ色で  
 もできなんしたかへ今おつせへした虫にでもなるきかへ 柳爰の二階ひろしといへど 梅ぬし  
 たちの相手になるやうな手のある女郎衆はねへといひなんすのかへ 柳あるといふとさマア茶  
 ア一ツくんねへ 梅ぬしやア口果報があんなんすよ今丁ど茶を入した 柳くふものなら口が  
 ほうだがこりやア香ものだから咽がほうだ 梅わりい志やれだねコレ小夜舟さんついであげ申  
 シな 舟アイト火鉢のかけにあつたちやわんをさり中にはいつておたふ 柳こいつアい、茶だコウその紙  
 につゝんだ物はなんだトあけてみれば火鉢の灰のいた おきやアがれおらア又豆こくりんかと思つた  
 舟わらひきついでびびどうなこつたねトいふ所へか 禿山本屋じやア十二せんのはきれたと申シイす  
 ぶる來り

からわきてとつて参りしたトのり入六まいつき 梅馬鹿らしいこの子ア柳嬢さんだからい、けども  
 あんまりゑんりよがねへぞよちつときをつけや 柳きをつけずともい、ぞよやつぱりこんだか  
 らおいらんの客人のめへでもかまはず此笄は二百ばかりいせんなまつげのかうくはたつた二  
 ツはうつてよこしいせんと正直にいやヨ 梅馬鹿らしふおざりいすはなぶ志やれなんすなわ  
 たくしらアそんなげびは悪いせん 柳それでもいる男の所へさつまいものむしんをいつてやつ  
 たさうだ 梅うそうあつきなんしだがさうまうしいしたトいふ所へきたるへやもち女郎左の袖で口をかく  
 りは紫のいたしめのむくにひはちやちりめんのおきべちやアねへすみ ませがきヲ、つめてへヲヤ柳嬢さんでへ  
 ざいしきのにしきるさいふおしやうづけつたあたりを一ツふるわせる  
 ぶましておざんすねト火鉢のそばへおやきみのわりいたれぞすはつておりイしたかへ 梅なぜへ  
 ませいつそたゝみがあつたけへよトつめて二ツ三ツ 柳ませがきさんかういつちやアそれ鏡らしい  
 がどうせへにきれぬだぜをしてあいけうがこぼれるやうだかならずそこらへこぼしてくんなさ  
 んなひよつとふんづけると氣がもめらアおめへの紋はおつなもんだの枝巴かきつものゑを  
 つきにしたの雷の鉢植じやアあるめへし みたがしはふたきくようならひてあやまりてまゝだたろのはふ  
 柳むくのすそもやうもこいつアあんしたあやすきに二葉葵かべちやアねへ芝居の木戸が蓮池  
 へ身をなげたといふもやうだ ませそんなにわる口をおつせへすどくらア志んすにトはこいたの  
 をふり上 柳コウあやまつたおりよヲば野郎のまりだと思ふさうだあつときまちげへ羽根だとも



ふさうだ 梅「チホ、、、、」トたばこをすねしやア今夜は誰さんだへ松さんかへ ませい、へ何此  
 ぢうの松屋からまいりしたらうさ 梅「色おとこじやアねへかへ ませ」後生でおざりイす甘露梅  
 のすくなつたといふいろのぢいさんでおざりイすよ 柳「イヤどうせいにむづかしくたどへるぜ  
 晦日ばきの鼠いらずじやアあるめへしコウトもちつとなんぞわかひひてへもんだトそこらに梅  
 さん此びやうぶの虎は女郎衆の座しきにやア目出たねへぜ 梅「なぜへそれでもどらは千里は  
 ちつどのうちにあるくと申すから待人がさう早く來るとよふおざんす 柳「それはさうだが又  
 千里もどるといふからわりい 梅「あんまりかへらねへとうちを去くぢりんすは 柳「なるほどこ  
 いつアさうだの志たが此虎のつくばつてかたをいからして居る所はなんの事はねへたばこやの  
 賃粉切といふ身だぬゆへたれもわらはず 梅さん斧をちつとかしな 梅「ぬいてか 柳「おめへもい、年  
 をして酒中花をからみつけてをくこともねへおとなげねへトみくのお 梅「馬鹿らしひまだとしが  
 いきんせんは 柳「としがいかねへも氣がつゑへおめへとしで三ノど斗り琉球人にあふだらう  
 梅「どうしんしたとへト是もあまり 柳「これさませがささんさはんなんな耳があふねへト此うち  
 うのつきにありしんさ 柳「みねへ小夜舟さんがはじめたソレだらうぢろ釜ひつくりかへつてたこと  
 かはる傘ひつくりかへつて介六とかはる八文く、ませ、梅「チホ、、、、 舟「此へでめをさ 柳「さ  
 よ舟さんどうだ氣がついたかトいふころへ朝く、こり上られる 初雁「らうかをッ モシへ柳嬢さんにはなが  
まきせのふり袖をきたまんさう 初雁「けて來て

できたからいらんがきておまんまをおあんなんしアサチ、せつねへトためいき 柳「がうせへ  
 鼻息のあらひ子だせ箔屋のうちへはおかれねへなんぞうめへものがあるか 初「いけへとおざん  
 す 柳「先へいきねへ今いかふ 初「サア早く御出なんしそしてね百代さんがね此多をぢらうじい  
 志とサトまんごうのぬきみへわかりみへ書たあく筆のぬき 柳「さつてひら アうなんだ〇一寸ト申上らうじ  
 ひやうつらにこんやはよくきたなせ御やくそくのまげいはへのきれをもつてこねへににくいやつ  
 だ御うらみにぞんじらう〇ぶ志やれな文句だサアよめねへ沈金ぼりの唐草をみるやうな字の  
 ぬだ 初「マアあつちへいつておよみなんしトむりに引すつてゆく、此きやくべしてほられるきもなく又きい  
 やすたてをされ所々のざしきへあそひにゆくをたの ませ「柳嬢さんのむたかおかしくつてあすひすきんした  
 しみに來るきやくなり此風の客まあるものなり ませ「柳嬢さんのむたかおかしくつてあすひすきんした  
 まいりしやう 梅「モウ一ツぶくおあんなんしな ませ「又いつて参りしやうト出てゆく 梅「さよ舟  
 さん硯箱を出してくんなトぬき書かゝる折からひけ四ツの かふるまはし「子ども衆寝なさへよくくく  
 ト二かいぢうふれる〇これなかのやくにてかふる一〇下には籠をおろす音のきこへ夜鬨ひければおちやを  
 挽た妓は大赦にあふた罪人をみるやうなこゝちにて欠をし伸を志ながら梯はた〜二かいへ上  
 りわか局々へ散亂するかつかちめへておまんまを喰ふ雛姫は恰も飢たる虎のごとく器にのこり  
 し魚の骨は化野に異ならずとやかくするうち音もなく右も左もまづまりて此所に海誓山盟あれ  
 は彼所に頓驚倒鳳ありて襄王が夢をむすぶときなりけり〇龜屋忠兵衛は梅川と深くなつて金にはつまれ  
かしこ 龜屋忠兵衛は梅川と深くなつて金にはつまれ



まつておればばんさう梅春がはたらきにてねすのばんに金をやりこひやり手配のひくるをあいづに下さしきへかくしなく  
 忠兵衛は下さしきくらゐ所につめたいよきふさんの申へはいり身をまのびぬる折りらむめ川はさしきのきやくをれむしてて  
 うづのかほて 梅川「さぞきうくつでおざりヒしやうモシ多はどいさいしたかへ 忠兵衛「きのふどい  
 てくはしくみた手前もいよく懐妊にちがひなく近くひつこみ察へいつて脱すのとむか  
 しの身なら相談の志やうもあれと何をいふも金がさきたつまつてのどをり勘當の今の身の上む  
 かしわすれぬ朋友のよしみにて少々づゝの合力でかすかのくらしはなしにならぬけちなしき  
 梅川「初におめにかゝつたはわすれもまんせん去年の三月それから一夜が二夜とたびかさなり  
 ぞれつたいとあひたひといふ癖を心につけてからとやかくとするうちに 忠「コレサ愚痴な合さ  
 らそんなとをいつたどつて借金しやくきんの云わけにもなるめへ。みゝをだしやト何なにりさ 梅川「わたしもど  
 うから其りやうけん引込ひっこて察へゆけばぬしにはあはれず多のたよりも志にくくなりんすそれに  
 まだきくさへ怖こはいおろしくすとやらひよつと死ぬまいものでもあざんせんよしや身みにけがも  
 なく出勤しゆつぎんをしてからが傍輩衆はうばいしゆうに顔かほみらるゝもはづかしふあざんすそれに志つてあいでなんすと  
 をりあまへをせいできやく衆もきれ。あもだつた馴染なじみもなくあの八右衛門づらの外は此こるの  
 きやくしはみな初ばかりそれにつけてはだんくたゝまるごふく屋のかり所くのかけてても  
 つまらぬわけなれば 忠「そんなら逃にげるりやうけんか 梅川「あたりあたりにきく 忠「そのりやうけんなり  
 やしやうがある實じつはむめ春が此智慧ちゑを付てくれた聞きはあしたアノ八右衛門めがままつて下のいけ驛

へ手めへをつれていくさうだおれをせきてめへにきをもませたかほりあいつがおちどになるや  
 うにいけすからふけるがい宵よひに地まはりめらがおれにけんくわを志かけたがあれも八右衛門  
 めがたのんだに違ちがはぬへ何かにつけてにくひやつた折よくあすは宵闇よひやみなればたんぼへ出る庭にわの  
 うら口おれはさきへまわつてあやうにげさへすればこつちのものだ打うちもなく今まではとなしも  
 せぬがこゝからは四里半わきの田舎いなか二の口村といふ所におれが實じつのおやと孫右衛門まごどのといふ  
 があるおちつき所はまづそこサ 梅川「そんならアノ梅春さんも志やうちで 忠「にがしてくれる  
 注文ちゆうもんであの子が胸むねにおさめてあるあすの手はづもあの子にきくや 梅川「ホンニ梅はるさんはるは懸  
 まりでおざんすよつき出しからぬしがせはいついてくんなんしてからわたしは苦勞くろうを身に引ひう  
 けておなじどきに突つだしに出た女郎衆ぢやうしゆうより夜具やぐもはやく志なをして又内證ないしやうのせはも早くはなれ  
 新造出しんざうしもはなやかにして志まひつねくも客衆きやくしゆうのめ其ほかにちつとも人ひとにひけをどらせず  
 たいこ持もや何なにやかやにも切きはなれがよいとひやうばんされ着きもの、摸樣もやうのあんじまで人にこれ  
 はどほめられるもみんなぬしのせはゆへでおざんすわたしは逃にげたらばつてつきりあとでぬしにう  
 たがひがかりんしやうそればかりがわたくしや苦勞くろうでおざんすト思おもひがけなき 次つぎの間まより あいらんへとい  
 くり 梅春「さつきにからあすこで始終聞しじゆうきヒした跡あとのとはわたしは香込かみこでありあすからかならず  
 お案あんじなんすなひとまづこゝを立たいで身二ツになつてから忠兵衛さんも勘當かんたうのおわびを志な



んしておもて向からいらんの身うけをし日かげのお身にならぬやう目出たく女夫におんな  
んしわたくしもかけていのつておりんすにへといふ折からねづのばん八ツのひやうし木をうつてまわるてうち  
んかた手に茶屋のおまごがさきへ立はやがへりのきやくはしこ  
をおりる○此きやくは風流の人さみへ  
はしこををりながら即興を口ずさむ  
けいめいのきやく

雞鳴曲

青樓擊柝唱雞鳴  
唐突佳人彈枕起

夢裡陽臺雲雨清  
無情亦復是多情

客「駕はそいつてゐるか 茶屋男」とうにはいつてをります

○第三回

金銀をつかふ客にもかまはず横に行は女郎の眞と卵の角道

□世の中は道こそなけれおもひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴なるとはどつと昔淺草に鹿茶屋のなき時  
代の歌なりけり今繁花のときなれば騷鷄もさみしきとを志らず熊谷の堤で小判をかぞへても氣  
づかひなしされば人の心もおのづから駱達にて烟花のにぎはひなどはいふもさらなりやぼには  
あらぬ水戸尻色と戀との鯉の二かい水の底なる鯉までもうかれうきたつ大さはぎはむめ川がけ  
ふのきやく中の島の八右衛門といふは金銀まんくの金貨にて女郎のにくがるにくいていつら正

めんに大あぐら 八右衛門「コウかれ野をみはらした所はどうもいへねではねへか持 鬮子」左やう  
でござります 茶屋てい主「こしは二かいの眺望は妙さふり袖 新さう さよ舟」モシおいらんのとこへお富士  
さんがみへんすは 梅川「ほんにノウトトふさいでゐる 女げいしや 里吉「観音さんの塔もみへます 八「なんだかお  
もしろくねへ日だ 鬮なぜでござへます御酒が志みますめへサアこれではじめましやう 八「い  
んや猩ぐが出發にてヤア志めへしさけはかりもはじまらねへ 茶屋てい主「まづおいらんがう  
かねへちつとうかし申さうじやアねへか 梅川「ちつとこゝろもちがわるふおざりいす番さう志  
梅春「モシおいらんへちつとうきくまなんしなこゝが志らけんすにへトむめ川にささられるなさめく  
鬮「モシ一ッおとしばなしがござります トふもんをちよひさつくり 花欄板に紫檀棹の三絃が會所の棚  
にゐて朋友の象牙の撥にいふにヤア聞ば三河島に湯治ができたさうだ芝居の三みせんなんざア  
土用休の内いつたといふこつたがナントおいらもいつてみやうじやアねいかと咄すそばに食客  
の檉棹犬皮の見世ざみせんが聞てゐてモシ湯治をなさるならわたくしもお供をいたしたうござ  
ります三ツ星の膏藥でもどかくなをりませんというから紫檀棹がどふしたよこねでも出來たか  
といへば鬮三みせんがハイちどかのさほを痛めましたかといつアどうでござります 茶屋てい主「  
おきアがれ 梅春「ばからしいねへ みなく「ナホ、ハ、ハ、ハ、トほごなく日もくれ燭臺なご出しみなく「八右  
衛門「きげんをなをさんさうかしたてささ吉  
おさりなごあつてやま時うのる ○かくてむめ川は忠兵衛がさぞ待どをならんと心せさざしきのやうす



うかいひてはづして出る庭の面さいはい宵闇折よしと心はさきへ飛石づたひ番頭女郎梅春は萬事に心築山のうしろにまばし立どまり梅春「小こにモシおいらんそのうちかけは人目だつわたしが下着の此小袖を上へきて御出なんし梅川「ホンニにげる今になつてまで此おせは喜んでもわすれはいたしせん梅春「ナンノおれいにをよびんしやう二の口付へ落付たらやうすをくはしく梅川「女の便で梅春「かならず待ておりひすにへあれくくおまへさんをよぶのはたしか八右衛門づらがこえでござんすみつけられては一大事と梅川が手をどつて足ばやにはしりゆき庭の志をり戸をしひらけばさぐりよつて忠兵衛「梅川か梅川「忠兵衛さんかトむめ川が思はず聲をはつすればそばに本を讀居たる梅はるがモシおいらん何をひとりことおつせんすと氣をつけられてきのつくは夢野の鹿のゆめにはあらでやはり箕輪の別荘に寝そひれしまへ梅川がどつゝをいつの胸算用おもひに迫る此時節モシこふしてにげたらばいかいあらんと心のうちに思ひしは定ためてかくもあるべしとすいりやうまたる其始終筆のゆくまゝかきつゝり色情に終身を認るともがらのすこしは戒めどもならんと薦の唐丸がもどめにまかせ紙くずかごよりひろひ出しそこらこゝらをつゝりあはせてついに小冊となし侍りぬ

娼妓絹籠終

序

近來世に行る。經典餘師と云書を閱に。鹽梅よしのおでんより。上手をゆきたる美味にして。盲目の杖闇夜の提燈。愚鹵な八兵衛をも明し。土手の八町をも照して。徳に入の大門口に至らしむるのばや籃輿は。此にしくもの有べからず。雖然乾坤でかく。癡呆組の俵々徒は。馴染の久ほど難有がらず。妄作ほどは手に不觸。固や小人にして大道を學ば。鱧を割に鯨の刀を用が如く。是等には難からん。彼等をりやうる庖丁には。録作者が相應と。筆をつ操て立あがり。己に艸紙を編けり。夫大樂通用とは申ども。永樂通寶の貨にもあらず。豊後申と號れども。兼好法師の類にあらねば。戯作の四書とは恐あり。顔靨らるゝもはつかしけれど。頭巾と見せて頬包。妄言から導木曾海道近道の拔裏も。至る所は芝蘭の室。鱧の店よりかんばしきを。一度嗅で實に入れ。虚々邑の瓢介等が。



鼻毛にとんまる蠅ハエといく。そのちにヤア道ミチはね云爾

時

寛政二年庚戌孟陬

山東市隱

京傳自序

戲げ作さく四書京傳子誌目錄

○大たい樂らく

大樂は月雪花をあさきにつかひ色と酒とにたのしんでたるところをいましむ

○通つう用よう

通用は質物しちりつの通用物の事にしてひどいくめんの女郎買を志めす

○豊みん後ご

豊後はすべて江戸げいしやのこんじやうをうがひ

○申まう

申はまうしんすの申にしてをつりきな所をさどす



大樂だいらく

意氣狂句いききやう

堅衆かたいしゆ曰大樂だいらく功者こうしや之の虚言うそ而兎角な入欲門いりよくもん也なり於隙ひま可見けん通人とんじん爲樂しつがく  
氣質きしつ者もの獨賴ひとりり金銀きんぎん之損しん而貧乏へんぱふ次之つぎ客者きやくしや必由是而迷焉まよはば則庶乎すなはち  
氣差きさ矣し

それ大樂のうへをいはは春は品川の沙干にあそびて身代のひかたとなるも思はず戀の淵の深  
みにはまりてれん手くだといふ悪魚のえじきとなつてはじめてをどろけどもをそまきなり或は  
上野御殿山飛鳥山の花見に幫間藝者を引連ては諸行無常の鐘よりもやたらむしやうに散したる  
紙花の下りを食ひ武家方の血氣盛なるは春色に心うごきはじめはよいりやうけんにてずひぶん  
錢のいらぬ樂と出かけ一日金一分の借馬に鞭うつて遠騎の游山もかへさには忽心の駒の手づな  
ゆるみて大門口につなぐ中の町の家櫻は寛保の昔にかはらねど人をなじからさる突出しの君が  
名びらきの蒸籠饅頭の山をなし櫻もひよんな所へうえられて生た花に見らるゝ花のくるしきぞ  
かし目に青葉山時鳥初堅魚かつほくの聲にはじめて心づきも夏が來たそふな今日はいつか

だど禿に聞くは居續に氣ぬけのまた客人と見ゆる其居續のるすはうへを下へかへしといのつま  
りは二ばん番頭かむかひに來てまかつへらしく左やうなお心てはござりませなんだといふに  
こちらは闇か雲にてをきやアかれそんなまじめをいはすとマア一ツ呑かよいイエ〜左様な氣  
せんでほござりませぬとはいへとまたじはすきはら御意は吉原一ツのみ二ツのみついに酒が  
人をのんで宿の事はエ、まゝの川へ流してままひ氣違ひ水にをばれてともに碗をおろし木乃伊  
どりが壺人になつて遊ぶもあり夏は墨水に游船をうかめ江戸藝者のひつこぬきをつかみこみだ  
んなひとりに神八人此人數舟なればこそ涼哉と口ずさむそばから三絃四てうでひきたてゝの大  
さはぎさいせんより陸に此舟を見て居たる隠者と思しきが嗚呼愚なるかな花飛ひ蝶をどろけと  
も人不知と詩の意はうたへとも盛者必衰の道理をまらぬ其はづじや千住の悪臭をかいてさへ女  
は臭皮袋と云所に氣がつかぬ俗物じやものあのやうにさはぐもみな臭骸の戯れじやほんに凡夫  
ではあるぞと憂世を悟顔なるも實は錢なし組のまけをしみ金持にはそんなめいつた思ひはなし  
物に感ずるも根か己か心の欲する所にまたがはず志を得ぬゆへの述懐ぞかし此隠者も錢があら  
ば生者必滅の場所へ氣もつくまじ陸から舟を評するも岡焼餅の謂なるべしむかしは日もくれぬ  
はや舟にのれといひしが此舟は日もくれぬ早く舟からあがりて呑なをさんと神頭の何某が水室  
に下知して隅田堤の下にこぎよせ中田屋かむさしやかたしは舟をもつとのぼせて眞崎の崎玉



屋といふはらか涼といつばこれも酒色の二ツに而已といまるなり文月は廓の燈籠五町を照しもし總角に棒があたりともなかく闇夜とならん景色なし軒毎にともしつらぬるてうちんは客人の身よりあくがれ出し金玉かとうたがひ唯人の氣をつりあぐるせんまいまかけには萬客の目をおどろかせさらに内しやうのからくりと思はれず絹張の燈籠はすいて見ゆれど女郎の薄情なる胸のうちはずこしも見へず二のかはりの硝子細工は名君をさかさにつるしたるかと思はるこれもそのをこりは正徳の昔中萬字屋の玉菊が追善のためにとぼしはじめしなれど今はそれにひきかえて衆人を迷はす煩惱のなかだちとはなれり近來附合の句に其意をいへるあり去るものはうとく燈籠のさいく過とまことむべなり十五夜の月見には高も賤も今宵の月をめて詩を作歌を詠し發句を按ず又此夜色里のにぎはひはことにさらなり此日深川八幡の祭禮にて土橋仲町三櫓新古の石場にいたるまで一年の大紋日月見と祭禮とを兼備したる遊び千日にかつた茅も一夜にほろぼしてつけのぼせとなりとの百姓となる店者あれば百日の説法も屁一ツに放て院をひらくお寺様ありこれぞ真如の月にあらでついに隱居の月見とまられたり旅行の月も一風流と南驛の傀儡にうちこみ兩松坂村田新叶己がさまく介六の氣位になり髪のはけの間から安房上總の月見と興じ田毎より手事を考へて異見する伯母捨山あすが日業をさらしなまでも須磨ぬ顔してくらすは損と氣はむしやうに高輪のまはりかぬる錢金散して遊ぶもあり其外端くのいさ

さかなる色里まで月の光りのわりなくて夫相應の月は見る事ぞかし青樓の月は今さらいふも思なり亦海晏寺正燈寺の紅葉見にはふしぎや今までありつる息子とりく化粧の見えぼうしてはては鬼住里にこけてままひ丹楓の錦より正眞の紅閨の錦にくるまる、樂み又わすられず冬は雪見とて家根舟に居火燧うはきにあらぬまんの事晋の謝安にまけぬ氣で馴染の妓を携雪見にころぶ所までといふ句によくかなひこじまが崎よりむかふ島のこと、浮舟の心意氣も見ゆるなり春秋の角力三ツの戯場杉田の梅見江の島の月見玉川の鮒狩真間の紅葉見金澤の雪見四季折くの樂みはかぞえ盡し難し是天地と云細工人の大からくりにしてたのしみつくることなしまかれども樂は月雪花の三ツにといむといひながらつまる所は女色ほどの樂みはなし月の清きとて女郎の胸の鏡にまかず雪の色白なりとて抱て寐たためしもなく花ものいはねばむなづくしとつて口舌もならずそれよりも眉は月をまかし肌は雪をあざむき姿は花をはぢさせ雨にいたまらず嵐にちらぬ美人を見てたのしみほど如何外に樂のあらんや花より團子色氣より喰氣とは飢饉年に生れた人の言なるべしこれ無量の味ひある女色の極意まらぬ故ぞかしと衆人皆是に同心にて今時の樂を見るにつまる所みな女色へこけるなり昔も人情にかはる事なく夫子衛の君が女にのろきをみてわれいまだ徳をこのむもの色をこのむが如くするものをみずと日しなり兎角捨かたきは此道の迷ひとまられたり然れども富乏のわかちありて艶なるたのしみまたくても難し花がうつ



くしいとて飛鳥山に居續もならず月の明なりとて引窓から見ては興もなし裸で雪も面白からず  
 さればたのしみは女色にといむるとはいひながらつまる處金なり金さへ澤山なれば愚なるも奇  
 才と思はれいやしきも貴見へ鶴にのり鯉に乗じ瓢から駒を出し石をうつて羊となす仙術より  
 もはるかをきおこぐ猪牙は天へのぼり四ッ手駕は中をどばすこれ金術の勢ひと志られたり志か  
 らば金なくては樂はならぬかと思へどけつして左にあらず顔淵は臂をげまて枕とし樂み其うち  
 にありと大平樂をのべしがこゝを思へば樂みは又金にもあらず唯心なるべしその心の樂みとい  
 ふは世の常の俗物には得事難しされば樂みは其身に應ずる處あり骨牌にくらす日もあれば酒に  
 あかさぬ夜半とてもなしこれも己が好ゆへのたのしみなり又女と心中してあたらいのちすつる  
 も樂みのこうじたるものなり又酒半買て鉢植の蕃椒見ながら女房とよもに一盃のんで嗚呼て  
 んとたまらぬ天徳寺ひきかぶりて寝てのくるもたのしみと思へば樂みぞかし金持とても樂みの  
 極意を志らねば氣鬱を散ずるために樂みをもとめて多くくるしみに至るなり志かれれば大樂の樂  
 の字にをみて得事あらばあやまちあるべからず昔世の諺に親苦勞する其子樂をする孫乞食する  
 と一人の樂より孝と慈との二ツをうしなふいましめの言なりこれむべならずや昨日まで日本一  
 の涼の場處ともてはやされ貴賤群集志たる地も今日は忽一河の流れと變ずこれ清水ならぬ盛衰  
 の世の中を天の然ら志むる處なりほんにそふじやナアと歎息するもをのれがをひこみの志る

しか

大樂畢



通用

意氣狂句

若衆曰無錢之謂通不迫之謂用通者半化之貧乏用者紋日之出入其錢乃寬永年中通寶大夫恐其久而絕也故筆之於文以授格子其子宵言無理中亂寢客衆不逢其夜爲千里語之則渡苦界省連則恨藏於店(下零)

それ通とはなんぞ列子いへることあり徳を以て人にわかつ之を聖人と謂財を以て人にわかつこれを通人と謂此言こじつけて見ればよく今の通としやうずる者にあたれり然れども金銀はのろまなやつでも澤山に持て居るなり氣質は安く難得唯通と野夫との差別を知るを以て通と謂ひ通と野夫との差別をあらざるを野夫といはんか予こゝに通用の二字を以ていさゝかすこたんをして風諫せん夫萬里を井といひ井を十あはせて通といふ是をもつて考れば千萬里の外までもよくせうちするを通といふべし又書的首末全を通といふまければ初會の首よりきれてのく末までも全くしていきかたのわるき事なきを通といふべし如來に三妙六通あり井井に圓通あり衆の

仙人も通をうしなふては下界たはけど笑れ狐も通力うせては麴町の市にさらさる吉原通深川通芝居通といふもよく其道を得たるをいふべし又用の字をいはん天地全功なし萬物全用なし又人に四用ありと入用らるゝ時は下女もたちまち御新造様とあをがれ用られざる時は麒麟も魯人の古傘に包まれ牡丹紅葉の類とならん又傾城の言に金銀をやくそくし紋日物日をたのむこれを總て用といふなり又急用事と書たる文に用のあつたためしなし酒屋の御用御用の外車留これ等にはもつとも説なし又通用とつゝく時は曾物の通用物の事なりこれについて頃日一ツの奇談あり爰に表徳を烏有といふ者あり其身代は飯器に車をまかけるくらゐのくらしなれば何くらからず一盛は傾城買に身をゆだねて花にめで月にうかれ雨にも志のび嵐にも通ひ逢方の鼻ひくからねば宿の鴨居を高しとせず元旦の庭のたき火より大三十日の蛤賣來る頃まで月雪花の三ッ蒲團の上座して他念なかりしもそのとゞまる事を志つて而後世に隱笠きて蓑輪の別業にひきこみ孤獨のくらしも世をあぢにすねたる處なるべしされば昔とつたる杵屋流の三味線も心の根べよければうは氣の調子あらはれず憂世を壁チヨロの帯に結び邊鄙も心安ければひとしほ住吉屋の煙管に心のやにを通し小人閑居して不善をなすのいましめを常にわすれねばかんしやくも片肌をいれて躰下にをちつき腕のいれぼくろも外山の霞にひとしくだん／＼にきへてなくなり額ぬきあげしもいつしか角とれてゆたかに眠る手枕をおどろかすは誰ぞ時宗にあらねば祐成が幽靈に



もあるまじく時ならねば池の水鶏とも思はれず夢かうつゝかど首をあぐればこほそもいかに異類異形の怪物あらはれ出たり風をおとし家うごきてをそろしさとへんかたなく濕氣の臭き事鼻をつらぬく鳥有は一目見るより氣も魂も天上へ飛でさらに人心地はなかりけるが彼化物のうち頭と思しきぐるしげなる聲して申けるはいかに鳥有かならず懼ることなかれ我は壽永の昔西海にほるびたる平家の一門にもあらず化物屋敷の煤拂でもなく質物の精なり世の中のはげども爲にぶち殺されて細目の恥をうけ七ツ屋の藏にまづめられて浮みもやらず流もあはず迷ひ居ることはや八ヶ月にをよべり夫昔より質と云物なきにあらず戰場に人質あり喧嘩に言質あり借金を質にをくとは女房が自腹を切る時の捨言葉にして清水の舞臺と同日の論なりむかしさる何某の上人とかや十念を質におきたる事ありしが質主十念のうち一念をもとさず故に此上生涯九念のみまうしけるよりて九念寺と云寺號何所にか今にのこりたるよしを聞くまかれば佛の方便ともなり又露と云字を質にをきたる連歌師もあれば風流の友ともなれり古人訥子は己が名を質にをきたる噂あり新田義貞はこがねづくりの太刀を相州鎌倉稻村ヶ崎の海中へ質にまづめて軍の利運を龍神にくどかれし事あり龍神これを感應して彼太刀海上に浮流しとかやこれ質物に流るゝといふ言残りしは此時よりの事なりけり今に其所を質利ヶ濱といふも此所謂なるぞかし又質艸といふ言に由ては萩の上借萩の下質あり或は燕と雁の入れかへ物あり天地も又質

屋の度をいはい置主受人のなき質物をとらず火事盗人は兩損鼠食ひは置主の損と提札にたゞしくまるす或は質に曲ると云言あり是十の字の尻をまくれば七の字となる是よりをこりしこじつけなるよし七ツ屋と洒落るも則此ゆへんなりそれもはたにゑんりよある時は唯ゆびをまげてみすればそれとささるなり志やれすぎたる凡夫にあらざや唐土にもありと見へて質店を印子舗と云質物を典貨といひ質札を當票などと云俗語あり固我は持主の身がはりにたちて憂かんなんをこらえ火急の難儀をすくふものなるに今は己が放埒に身をもちくづしやゝともすれば我等をくるしむる事ぞかし或は女郎を身受せん爲に親からゆづられし家藏を家質にいれ其又女郎も間夫に狂ひてすつ裸となり奔駒下駄輝まで質入して苦界十年損料屋の爲にくるしむあり或は初堅魚の名代に給をくるしめこゝが江戸ッ子の尻の穴の廣き所と隣家のとくぢつをそまらながらこれを喰ひ又は一人の娘を人質に入て博奕にうちこみ又は五臟のわづらひなる夢をたのみて富の私を買過し主人からもらひためたる仕着せの布子を殺すもあり武士はなまくらならぬ大小もまげ出家はすぐな心の佛像までもまげるげな質を置いてうける事なきは恩をうけて恩を知らざるがごとくなりとても我はつうくつならず利あげをされんよすがもなければ此身は鼠にくひさかれついに骸は柳原の干店にさらされん此恨をばらさんには貧乏神の末社となり彼思不知の徒が皮肉にわけり長く是等をくるしめん汝はすいもあまきませうちの介なれば此事をかたりき



かせ世の中の不埒者どもに傳てもらひうけるもさんあてのなき闇雲質を置ぬやうに心得させんと質屋地獄の番頭大王にまばしのいとまをこひこれまであらはれ出たるぞやとヒウドロくのあさだまりかきけすごとくにあらざして南風にあふた海月のごとくふはりくどうせにける鳥有も始のほどはおそろしかりしが質物の幽霊に逢ひし事古今に奇なる事なれば彼等が述懐なかく面白く有増をおぼえしを予にかたりしが彼質物の精がいひし如くもし金銀の急用ありて質を置ともうける心がげなきは恩をうけてひどき工面をまぬがれし恩を忘れぬにあたるべし其時は必ず質の怨念とりつきて己くが身をくつがへすことうたがひなし金をひろふたら浴衣を染よ肩にかなてこ裾には磁質に置ても流れはせまいと謠へども八月がたてば流るゝなり利上の志がらみせんよりもつまる所は儉なりいろは短歌の志の字の一句に質置事が上手にてと女房をいましめしも不宜乎

### 通用畢

### 豊後

### 意氣席中

#### 樂酒亭主

此長慕茶番而時語之不肌柳橋乎  
有隙日待夜來未茶飯食乎  
人不聞而不喜不亦素人乎

土佐上下に外記袴半太羽織に義太股引豊後かあひや丸裸といひしは予等が生れぬ前の事にて今は土佐節も出しがきかざ外記は勿論半太夫も語人なしあまつさへ中あふみの半婦もまでが其名絶たり義太夫は今に盛なりといへども是も好不好あり豊後はきらひなく常盤津の津々浦々まで富本の末廣し世の中此二流のどゝかぬ處なく上は玉籠のうちより下は薦張の芝居にいたるまでかたらずといふ事なし彼方の横町此方の新道常盤津富本の表札なき所なく店子の娘の寒弾には大家の親父が看經をさまたけ鳴物停止の浴室には湯番の氣をいたます豊後梅豊後竹あきなふにさへ此音聲をうつすこれはまた名によるゆへとも思ふへきに蝶くどまれ放し龜くまでが此淨瑠璃の節あらはるゝぞかし夫淨瑠璃は信長の時代小野の通女か牛若丸淨瑠璃女の事をつく



りしよりをこりたる事人の知る處なり又極樂浄土に淨琉璃世界といふありて迦陵頻伽の藝者で  
 やい日夜淨るりを語て留主居井息子ぼさつ或は年季ぼさつのたぐひまで此世界にて金箔をはが  
 さるゝ事不鮮と此道に識のお寺様のはなされしなり斯て淨るり世々に流れて今其中に豊後節と  
 いふもの出來たるなり是いやしけれ共樂の餘風にして人を和するの器之樵歌牧笛樂ならざるこ  
 となし固豊後節は文章に色欲多く音聲嬌亂なり志かれども其どり處によりてまんだら姑の小言  
 馬士の悪言を聞にはましなり試に一ツ二ツをいはん高尾懺悔と云にいつかおの字の名をつひて  
 といふ文句あり曲禮に女子許嫁して并而字此語にあたり又お半の淨るりに唯うつむひて  
 なんにもいはずと云文句あり詩曰奏假無言と此たぐひ多し爰に又さる新道に黒格子を志  
 つらひ竹の管すだれかけたる淨るりの稽古所あり表札に難波津野路梅と援山流にて志るしたり  
 火とほし比こゝへ來る二人の若いづれも年季ものと見へて一人は澁染のうはばりをしてさらし  
 の手ぬぐひを肩にかけ一人は伊勢縞の布子に棒縞の前だれを志め是も角もつこうを染たる手ぬ  
 ぐひをかたにかけいづれも湯がへりと見へ門口にて伊八「サア源介どんへらつし 源介「マア  
 きさまへらつせへ 伊「ナンノかまうことはねへさきいへらつしな 源「わしやアはじめてだ  
 からきさまさきへへらつし 伊「そんなら待つし小便を一ツやらかして 源「路次は名ひらき花會のすり物で  
 モシそけへ小便はなりません 伊「ホイこりやア御めんなせへ大わらひだ 源「又むかふのさへそのあ  
 なたをたれてしまひすだれをし

あけ 梅さんうちか 梅「どなたへ 伊「わつちサ 梅「チャ伊八さんかあがんなせへな 伊「サア源  
 すがらつし 二人内へ入る内の道具だてを見るに獅子口の花いけはむなく状さしこなり屏風は名ひらき花會のすり物で  
 はりりつばな鏡臺の引出しのくわんに三味せん三の糸をひもにつけたるぬか袋かけてある(お梅)はあいう  
 へだのよむれた小袖に鶯色を黒くいろあげしたごんすの帯をしめあひがみこ見へてわらでたば 梅「伊八さん此間は  
 ねたひつつめの島田此げいしややすやくしやさいる事にてそのぬかをかいたよせて 梅「伊八さん此間は  
 おさうくでございやしたモシおまへこつちらへおいでなせへし 源「アイこゝがようござりや  
 す トこいつはまたいつかふなさいゆへすこし 伊「コウ梅さん此男アわつちが友だちだがちつどならつて  
 はにかみ伊八かうしろのくらき所へすばる 伊「コウ梅さん此男アわつちが友だちだがちつどならつて  
 見てへといふから連れてきやした 梅「よくお出なせへしたねへそりやアもう ト火ばちのふちを モシマ  
 アもつどこつちへお出なせへしわつちやアもう伊八さんも志つてゐなせへすがとんだぶちやう  
 ほうもんどやらなれば 源「是からおたのん申やす ト手ぬぐいをひね 伊「武士のつきやいはかたひね  
 トおもしろくもれ 梅「チホ、ハ、ハ、トそらわ 伊「コウ源主もつどこつちへきさつしな此男はわつちら  
 へ志やれを云 梅「チホ、ハ、ハ、トそらわ 伊「コウ源主もつどこつちへきさつしな此男はわつちら  
 どちがつて口きようだからできやせうよこはいろなんざアきようさ 梅「ほんにかへきよてへね  
 トあはせ 伊「コウ源主氣をつめちやアわりいぜ 梅「そふくわつちらアふざけもんだからそれじ  
 つかみ 伊「コウ源主氣をつめちやアわりいぜ 梅「そふくわつちらアふざけもんだからそれじ  
 ん此男ア何しやうばへだと思ひなさる 梅「どふも志れやせん トすこしか まちなせへト源介かきものを  
 志れやしたたばことんやかへ 伊「にほひをかへれちやア志れるわつちらアなをだぞきに木薬や  
 ど見られる 梅「伊八さんおめへ清明丹はへ 伊「ほんにあげるのだつけ又わすれてきやしたまだ



わすれた事がある。ト此ころはやるにがほのゑをすつたたいせもみのたばこ梅さんこりやア此男が弟子入の何サト出す。梅「こりやもうもしあなたト源すにもあ。モシかゝさんちよつと來なみかてしやうじをあげ口にくはへたま。母「こりやアもうおありがたふござります。トきゆうにきけんよくなりぬるひちやをわかしなをしてる也。梅「伊八さんおどつひおめへのめへを通りやした。伊「アッどこへいきなすつた。梅「百川に座敷があつてさ。伊「頃日はさしきはどふでござりやす。梅「留主居衆の寄合がやんでからいつかふさ。此うち源介はたまぢり／＼さばな。梅「モシなんぞはじめやしやう。伊「コウ源主をれといれかはんね。源介はすまはきの時内の娘のしやみせんのはこりをはいたばかり生れてからはじめ梅「抑松のめでたき事萬木にすぐれ。源「口のうち。そも／＼茄子のめてたき事はんぼくにすくれ。伊「コウ源主そりやアなすじやあんめへ松だせ。源「わしやア又一富士二鷹三茄子と云からめでもへは茄子かと思つてさ。伊「そりやアわりいれうけんた。梅「ふきだしそふなるをこらへきを長くをしへてゐる折から來るは紙間屋の手代(半六)是はさめ仕立よほごめんもできる。此げいしやも此男をできるやうでできぬやうに折く。半六「は、ア稽古じやナト内へひちをあてをくゆへ時／＼ためになりここの内をよほごしこなしたまうちあり。梅「半さんかちつと御めんへトやばりをし。半「なんのイナ御ゑんりよはいらんじや。源介は人かきたゆへもすこしさけてみへる半六伊八に。半「こりやなんぼ御時節がらじやとてゑらひけんやくじやなかゝさん炭どりかしておくれんか。母「半さんかサア炭どり。半「をつとよし／＼おやちさんばどこへいてじや。母「題目講へめぐりやした。半「きつい後生のねがひやうじやなそれじやもう極樂のさき

へゆきすぎるじやらうが。母「それだけにつみをつくるから五分／＼さ。トげいしやの母だけ。半「コウかゝさんこれ夜食のおかずにさんせ。ト戀に身をこがすうなきのかばやき。母「こりやアいたゝきやすちやうどあの子もやしよくまへさ。半六ゆびのさきでさくらば。半「おしやうがでゝをるが座しきでもいふてきてか。梅「けいこを。あした堀のうちさんへいきやす。半「何をあてじやか信心をなさるもんじや。な。トいふうち四ツのひやうし木チヨン／＼さうち來る源介も伊八もびつ。伊「なんときれいなもんだらう。ト子本町三丁目木すり仲間唐ぐらみぢやアア、いふ代物はねへきさまなんぞアかほがあたりらしいからよ入ふてう七夜五分といふ事。くするどできるぜ／＼。源「又あすのばんいつ志よにあゆんでくんねへ内がもう志まらねへけりやアいしが。伊「そつちの番志うもやかましいナアおやかたはそふもねへ。ナトいそぎゆく跡に半六はすれどこれ四ツをきいて。なんじややらもやくだいなほど夜がみじかひぞこが勤の身じやかへつてはなちついて居られす。こまそ／＼。母「もちつとはなしなすつてもよからう。半「店でも又ふたりほどかぶつたじやそれじやさかいこちらもたいいきをつけにやならんじや。梅「半さんそれでもおめへ頃日は石塲の豊倉へ又志こんなはるそふだね。トすこしやく思入いふてうれ。あほうらしいたがマアそんな事いふてじやせいもんじやははい。梅「いよあすのばんきしやう。半「ない事いはるゝほどつらひ事はないもんじやコリアあのわろたちがざうりばきちがへはせんかな。トあるじや／＼。梅「母へかいてせなかつた。ト半六。なんじややらいかふさむいばんじや。トたち。是等のでやいさまで稽古するでも



なけれど皆此藝者を一ツてんばりの色ちよばいちと見ゆるなり又博奕の筈と女藝者はころびやうで一夜檢校の幸多し七ころび八をきとは藝者のうへの事なるべしまかれども藝ではやると顔ではやると二いろあり是鳥に驚孔雀の有がごとし娘は主君のごとくたかぶりわれあればこそと思にきせて我まゝいふ不孝は象牙の撥どもにあたるべし親は臣下のごとく我子にうやまひかしづき三味線箱をかつぎ駒下駄をなす事皆欲の皮より出て三絃の皮よりもあつし又これらがをこりをたづぬるにかゝるいやしきものにあらざ漢土にては妓といふて。莫愁。陽阿翠翹。などいふ名妓多し和國にては白拍子とよび。島千歳。和歌前。など世々名あるものかぞへ盡し難し今の女藝者此流れと謂つべし上方にては藝子舞子といひ江戸にては踊子といひたり元文のはじめに名高き。衛門。照。艶などあり其後。辨天豊。地藏幸などときめきけり。新富。直。百合。秋などちかごろ是につときたり唯人の愁を忘れまむるの器なりまかれども今はをどろえてこれらに比すべき者をきかず

### 豊後畢

### 申

### 酒氣貧通

#### 町傾城辛苦情凡十年

通子町 馴染傾城 馴染ハ三  
 傾曰主 不遠千里而來 亦將有以見一艶書 平(床花ノ反シ叫ヒ向ノ人)他ノ  
 通子 妄曰君何必曰茶終爲腎虛而已矣 茶ハ言フ虛也

田の中に棒の壹本立たるは甲か申か扱は申か。柳のかけから申シくどよび花道から申上ますといふもみなそれくの身の業なり。人間萬事さまゝに世わたりする中にもためしすくなき流の身は。うそいふことの常なりといへどもそのうちにも實ありてほれたほど忘れぬものなく。惚られたほど捨がたきものなし。こゝに去ぬるころ。大岸屋といふに花衣といふ娼婦あり彼が客に富士井田藝吉といふ艶治あり。たがひにほれつほれられつ。かのわすられぬと。すてがたきがこうじくして終に心中と極まり。二人りが中は深けれども。淺草の中畝へ去のび來り。氷の刃ぬきはなし。すでに胸のかゝみを破らんとせしに。お刀の手の内御無用とこゑかくるものあり。はッとおもふてあたりを見れど。畦に立たせ給ふ石の地藏尊と。案心子の外。人らし



きものなし。扱はわれ／＼が心のおくれかど又刀とりなをせば。又御無用と聲かけしは。たしかに石の地ぞうそんなり。兩人はびつくりし。申地藏さまわれ／＼は心中して志ぬるもの。となせでも小浪でもないに。御無用と聲をおかけなされしはなにゆへとふしんをうてば地藏尊莞爾としわらひたまひ。嗚呼やぼじや。凡夫じや。そちたちがいのちは今が九段目じやなひか。あれがどめたは外でもなひ。さだめて先の世をいそぐでもあらふが。ちど話したひ事が有から死出のたびぢのはなしのたねに聞て置きやれ。かならず又齟の變化じやと思ふな。夫心中死は無分別な事志れてあれど今好色の世の中に。刃ものざんまいこそせぬ。一生連そふ女房ゆゑに。腎虚して死ぬも品こそかはれ道理は一ツ。又は金がたんどほしひとて。氣をつかひ氣病して死。或は食傷して命をうしなふなどはは金心中下婢とも謂つべしおなじくは女の道にて果る事こそ順なり。世界の人皆其穴門より生れて。又その爲に死す是花は根にかへるのだからりぢやものと。定規杓子にしたる不了簡より。二ツなき命を一女の爲に捨。心中死を自慢らしく骸を野經にさらしてぢやうるり繪ぞうしに長く恥をあらはし。讀うりの外よろこぶものなし。今時の心中は義にもあらず情でもなく。唯不自由故のむり死し又うは氣なるむすこむすめは。ぶんどぶし新内ぶしを聞き。まばゐを見る度に半七三勝が死だは尤もじや。おそめ久松が心中は道理じやわれはどまてに懲の情をつくしたから命も捨そふなもの。われらとても捨かねばせぬと素直

なる心より心中死をうらやましがれど。まばいである心中はあゆむどころが扱じやゆゑ犬の糞をふむきづかひなければ。着るもの引ずりて行に品よく一ツ對の美服。紫のほうかぶり。どうもいへねど。もし是がほんまの事なら。一ツ町行くとお手に逢はされた事。又うしろにはぢやうるりといふものありて。拍子よく。今死ぬる身であどりながらゆく事。いかにもおもしろさふに見ゆるなり。扱刃をつらぬひた所がいたくもかゆくも何ンともなく。骸に毛氈をかけるゝとすぐさま三階で休息し。嗚呼今の心中はきつものであつた。よふ見事に死だど切落しでぢや／＼のくるを聞ているなど本の心中が加ふ行かふものなら。なぐさみに死んで見ぬものは壹人もなし中／＼そんな甘口な事にあらず。ほんまに死るはきつふさへぬものなるべしいつたんのむふんべつで死ぬるは。ひつきやういのちを弄にするやうなものどの道無益のさいご。三世あんなぐわのたねをまき不忠不孝のつみいつの世にかはまぬかはれんと自笑腹にて曰ければ。兩人是を聞。是地藏どの。そなたはいかう志んぢうを茶にさるゝが。そりやかたおしぢや。みやうもんに死ぬとばかり思はしやるは。無量の味ひあるこひの情をまらぬからの事。どうりでそのやふにわるかたひ石になられた事と憤ふれば地藏尊。なるほどおれを戀まらずとの云ふん尤じや。高が此うそさびしい所に立てある安地藏じやもの。おりふし朝がへりの客があれが頭え。煙艸のふきがらはたくより。戀句はさつた身の上なれど扱をしてくらすたすけには。先



の世の事はまた大通じや固心中の腹といふはとても此世では添はれぬから。來世で契らふといふが山とみへる。志たが外の事はみなそつちが尤もにもせよ。是ばかりはあてにはならぬぞ。今生にあるほどだにやすきいとまなき身のむなしきはいふならく捺落の炎に心をこがし劍の枝に身をつながれ修羅の陌に争闘して。こちらの人女房をもとよびかはす隙さへなく。ふたり志ッぱり寝るなどは思ひもよらず。もし又最期の一念により。上々の首尾にて浄土へ往生することありとも。變生男子といふて。かあいと思ふ女は。たちまち男となれば。極樂を行てからはじまらぬ事女が男に成つたならいなものであらふぞやとけちをつけたまへば。二人りはおどろき。扱はごくらくでは女が男になりますか。とてもちごくはたのみなし。すりや來世でも添はれぬか。志からば死でも益なきとと。うち志ほるれば地藏尊。ヲ、いたひ思ひをせふより思ひ直して生たがまし。外に思案を志かへて見やれとねんごろにのたまへば。兩人はやうくどく心したがひに小袖のちりをはらひ。扱はなした刀ととも命をチャンとさやにおさめ。すごくくるはへ立かへる地藏尊跡うちながめ。あゝはいふて見たものゝ心中死もみなあんなん。天命じやと獨つぶやきもとの蓮坐にたちたもふ二人りが延命地藏尊。利益のほどぞありがたき

申畢

京傳予誌大尾

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 山、谷、日、間、武、人、編、高、丁、神、傳、）



自跋

夫洒落ること難し。黃山谷が曰。周茂叔が人品甚高し。胸中洒落たる事。光風霽月の如し。是等を洒落の親玉と謂へし。然れば世界の洒落悉皆洒落にあらず。於是予か志やれ本の不洒落なる事を志るといふ

自叙

夫頼朝公の御願會より。大は獨大磯の賑ひなり。虎少將を初として。許多の妓女色をあらそひ。萬客爰に通ひ乍。梶原か佞は。宵宿りの矢筈を違ひ。小林が慢は。左右の髯をかき撫。祐成が二日酔の衛足。時致が疳癩は煙筒の皿を挫ぐ。羽織工藤あれば。羽織歌妓あり。兄弟の男子等あれば。抗籠の妓女衆あり。或恍惚て近江の實情あり。八幡で首の義理づくあり。汐息の猪牙舟に範頼公は。鳴子の音に神を飛し。一切遊びは對面の三方のごとく扱れ。外へ出て居る妓女をば。寸間狩場の切手あり。於是友切丸とともに魂を紛失し。赤木作とともに家を鞘はしる。豈滿江心を痛さらんや。鬼王が忠言。却て耳に逆ふ。是鎌倉時世の妖境にして。星月夜の井の深く戒。且惡所ぞかし。



北條時方寛政三郎  
祐安辛亥の荒次郎  
鬼王の正月和田醜

の三日目  
京傳醉中誌

仕懸文庫目錄

第一回

大磯往來游戲船中之談

第二回

朝夷名祐成醉ニ風流一忘還

第三回

舞鶴屋傳三教訓惜レ妓

第四回

梶原誇口罵レ蝶  
妓爲ニ時致一誤ニ終身









其二

四園

山東京傳著

大磯 風俗 仕懸文庫

第一回

東山に妓を携し漢土の驕者もいまだ綵帛舖の出番のちよつきり遊び酒肆の枝藏がへりのたのし  
 き事を知るべからず爰に後鳥羽院の御宇文治建久の昔鎌倉の巽にあたつて一ツの女肆あり大磯  
 と名づく爰に來りては陶朱猗頓が富も桂林の一枝のごとくこゝに居ては昭君楊妃か美も崑山の  
 片玉にひとしく黄金の塵塚鬱氣の捨場湯氣盛の場所にして顧卷安座の失禮も所がらとて目にた  
 らずサツサあせくの鄭聲じつに雅樂をみだし忠臣もまよひ孝子もうかれ老たるとなく若きと  
 なく權介となく八兵衛となくやたらに行むしやうに通ひ振らるゝあれば照らさるゝあり或は討  
 或は被り陸を行ものは稀に舟を行者多しゆく舟のいさみある風情かへる舟のおもひあるやうす  
 猪牙舟の柏餅は苦舟のまんぢうを過り舟棧橋へつけば心とんで先へ上りおちかいうちと港板を  
 つき出せば神あとのこる船頭たつとまれて君のごとく客人茶にされて臣のごとく羽織といふ  
 は衣服にあらず新子とよぶはもち米にあらず昨日の娘分は今日のかみさんと變じ羽をり化して







「こゝが大磯の新市葉といふのか 朝」そうサ 團「こゝの坂戸屋のうちへ京の次郎さんときた  
 事がござりやしたいしうちだねへ 久「こゝの新みせもすだてができたばかりで 朝「今にこうし  
 てあるのう 船中のたばこははやくのり茶屋からかり 久「モシ枕箱の引出しにほくちがござりやす 十「チ  
 ットしやうち ト火な箱のふかい引出しをあくれば舟手がたさあたらしいるぐい二本四 こいつアいつこうだ  
 團「ドレうつて上ゲやしやう 朝「引出しの中からぬを引 すり出し上ひきをよむ なんだ青砥屋にて藤綱さま夢の戸にて志げ  
 よりコウぢい此おまげといふナアどつから出る 久「ホンニそのぬをといけるのだつけなにさ  
 中うらのちいぶ屋のはいへサ 大いそなは丁の子どもやある所をなかうらさ 十「大いその振市葉といふのは  
 こゝかへだいぶ舟がついてるにぎやかださふだ 朝「よくするからにぎやかサ 十「こゝの大智屋  
 とやらいふはどれだね 朝「大ちやといふナアあれアノ下駄うりの荷のをりてあるうちがそだ  
 十「富倉とやらはへ 朝「とみくらはアノ赤くぬつたとうろうの出てあるうちさ 團「モシ爰のと  
 みくらの出見せが花川にござりやすねへきよねん山のかへりによつて志やれやしたモシはやり  
 やすねへ 朝「コウぢいアノ湯川屋のわきのちいさな稻荷りやアなんといふ 久「山田いなりと  
 いひやす 朝「コウ祐成さん此左りの堀が日記どのぼりといふヨ大いそつうのよくまつてる所だ  
 トいふ折からあさよりかまくらさや丁川岸のちよきおくりの 子ども「おくめどんまつかりもちなよ日傘をふき  
 へりをのせてくる船中には子どもさちや屋の女さのつてある 子ども「おくめどんまつかりもちなよ日傘をふき  
 とられるよ 茶屋女「こつちの舟 茶やあをと屋のおちさんどけへいきなはるわつちらがほうへはきつ

あもんだね 久「おくりけへりか 茶屋女「アイちつときなせへしな トいふむかふから又一さうのちよききや  
 つけ 子ども「チャ善さんだよ 茶女「チャくよくおいでナせへしたね 客「今けへりかおくりだど  
 いつたからけへつてきたてうどいゝ所であつたサア舟をけへしてくれ トたがひにそうくしくわめき  
 何かはなしながらいそぎゆく〇これに此きやく此女郎がなつみにてきた所が他所へおくりにい 朝「こいつアいゝゝ  
 つたさきまむなくへつてこゝまで来りしなりてうじよい所であひ舟を引へしとるなり 朝「こいつアいゝゝ  
 あゝいふ所が大いそ遊びだよそしていゝちうどしまだおちい鳥羽瀬の女郎だの 久「さうさあの  
 子なんざアみへきでの板がしらさ 板がしらさよせばの板がしらさいふ事大いその通詞也此舟はさのみいそぎも  
 せればやうく右に白ふねいなり左にまゆみの四てん川岸をみてゆきすぐるなり  
 朝「祐なりさんコレ右りが白舟いなり左が志みの四天河岸すなはちあの堂が志みの四天だこ  
 つちらの磯井といふのれんのかゝつてある藏ずくりが繩丁のてやいのやりくりをする七ツヤだ  
 トかうしやくする所へ又あさより二人せんごうのちよき奉公人らしきやつをのせいそぎ来る又そのあさよりおななく二人船ご  
 うにて一そうこぎきたる跡より来りし舟のきやく何か船頭にさまやぎしが志みの四天がしへ舟をつげ一人の船頭あがり一さん  
 にかけ行ききの舟はもはやい 十「コレ朝ひなさん今あの舟はなせあすこへつけて船頭を上ゲたのう  
 朝「よくある事だがあれは大いそあそびのきもといふ所さ鳥羽瀬の客とみへるがあのりくつは  
 先へいつた舟のきやくと跡からきた舟のきやくと同じ女郎をならんで買といふやつさあとから  
 きたやつは先のやつをみまつてあるから船頭をあかをかけさせてさきへ口をきりにやつたのさ  
 先のやつは跡のやつを見たらぬからうかゝいつたがなんぼいそいていつてもモウ後手になる  
 といふやつサ跡の舟はいくらおそくいつても先へ口をきつておきやアこつちのものさきこへや



したか其又口をきるといふ事は大いその通言で青樓ならままひにやるとをなじとだあとから來たやつはぢよせへのねへやつサ「十」かんしんく其道によつてかしてこいだこいらはもつともなりくつだ 團「宇治川といふものだね」トはなしのうしろへつ 朝「大ぶにぎやかだわ」ト舟のならんでついてゐるをみてる みてこいつア出てゐるも志れねへは「トいふは一たい繩丁の子ごもはかすくなくゆへ舟の高で大ていきやくの 團「こゝにむきずな胡瓜がながれ付てゐる」久「そりやア河童へやるといつてながしたのさ」ト久は へ上りちや屋へまらせに行所へおくりさみへて客と子供と娘ぶんつきそひあさより下女すとりぶた船頭「おあぶなうござりませぬ」客も子ごも舟へのる娘ぶんものりてうしの口をみよしの方へむけるこれは 舟がゆれても酒のこぼれぬやう「久「まらせて」モシへでいなきやすヨ」朝「いまくしいさうだらうさ うだらうサア祐なりさん上ねへ」十「マア團三さきへあがらつし」團「そんならあさきへでやしやう」 十「チ、コレくこいつア大さわぎだア、きみがわりいコレ早くどつてくれ襟へ舟虫がはいこんだ」團「それとりやした」ト三人舟を上る朝ひなは桐のまきの下駄をはく祐「雪よしのかしぶさんをかたにか 來たたばこぼんをわたくしは此かり物をけへしてああとからめへりやす「朝「早く來たがい」ト三人ゆかたてにさげ

野屋かうらいや(のこら笑)、~~~~~のホ、~~~~~こホ、~~~~~

第二回

暖簾風にひるがへつ 颯て家名人を招くとは殘口か筆勢にして前の家名は風呂敷にのこるとは風來が妙言なり爰にかまくらの巽大いその繩丁に鶴ヶ岡屋といふ大暖簾をかけたる茶店の賑ひ熱酒の香ひ萬客の鼻をつらぬき厨下は湯氣上ツて霧のふかきごとく駒下踏を持てかへる廻しあれば火索箱に上草履をゆひ付て提來る船頭あり口のかゝる妓女あればあいてかへる舞妓あり婢女素足で飛で會所にいたり鯨の煮つけは細生姜をせをつて器におどる 下女おいれなるみまぼりのゆかたにくるごんすのおびごんむすり にもへぎのいささなだのひもつけたる前だれをまめ けふはけしからねへあついでよモシなをし肴が一ツおびのうしろへあふぎを立にさしかみはくしまき けふはけしからねへあついでよモシなをし肴が一ツであるよ 人やうりばん「チイ、今のふたと三ツつみをだしなよをまやれてかくいふ いね「できたかへト云所 廻シ」來 おはくさんおむかひでござりやす いね「おはくさんはでなをりだよ」でなをりとはすく した事 廻シ「アイト、へいれ「だし物をもつて二 下女おふさ」利久小ものゆかたこびちやなこの横座敷のおき なり 廻シ「アイト、へいれ「だし物をもつて二 下女おふさ」をびりんさうじまがひのまへだれ やくは濱本のおなじみださうだからまらせてくんやよそして和田屋の送りのおくり物をつんだかのうりやうりばん「そんなおそまきどうがらしじやアねへ」ふさ「チ、こつさに志やれるもんだの ゆきよしの女さきほごから上り モシへおひきさんの事はどうしておくんなせへやすおたげへのこつてござへやすおたのん申やすトいふのは雪よしのおひきがななじみのまきやくがきくあるゆへかりにきたのなりまかれども 此間こゝから雪よしへかりにいつたさきぎりをわろくした事があるゆへそのいしゆにてら



ちがわいすわざと つかつてをくの也 ふう「アイ今さう申やしたが一座にちつともめがあるからすんだら上ケ申やしやうマアいつてきなせへ 雪よし女」そんならお早くおたのん申やす トそこへ馬鹿くしいまたゝかまたせたもめがあるも気がつゑ ト口小 ふう「きがつゑもきがつゑすかねへ女つツちやアねへよ 云所へ朝、十、團 三人來る ふう「チャヤ」朝比奈さんようお出なせへしたねどなたもサアおあがんなさへし 娘ぶん ふう「よくお出なせへしたおはきものをあげてくんな 丸本ぐらいの おきやくだよ朝」はしごを上りかけてをくをみればまかけぶん 四五三みせん箱五ツ六ツあるゆへむねごきつき けふはこりやアごうせへににぎやかだ まかけぶんこそいふ入てもたせて來るぶんこそ大いそにてきものをまかけさいふ事人の去る所なり尤まかけぶん はんごを持せる事は繩丁にかぎるゆへに此冊子のげだいなす 朝、十、團 三人二がいへ行 たき「おツつけすしい所があきますからマアこゝへ ふう「ちやかばんに三ツのせて來り モシ此ころはおとうくしうござりやしたねへ 朝、いそがしいわなでへぶにぎやかだの たき「此ころは相應でござります いね「さかづき持きたる朝さんようお出なせへした 朝「おどついで雪の下の堀井町でみかけたぜ いね「あいサかけにめへりやした トいふうちいろく ふう「はをりを きて來り こゝは風のへりさうもねへざしきだのモシ舟におたばこ入がござりやした ト出 ふう「おちさん一ツのみなさんねへかサアどなたもお一ツおあがんなされやし ト少しばきまほる所へこの内でのさ おひで「來朝さんよういらつ志やりましたモシへどういたしや志やうね ばく女だんごさあだなをさりし ふう「さうサ 朝」そりやアかくごうのめへだがこゝの二人をはたらいりやアもらひひきものう ふう「さうサ 朝」そりやアかくごうのめへだがこゝの二人をはたらい

てくだせへ ふう「おふたりはお志よけへだよ 朝」いゝゆかた日本國寺ぎれのかたいな ひで「此ころおきやくがそろひにおだしなせへしたけふはもうあやくだねへ今わつちらがうちからうつくしみのが二三人あいてけへりやしたがすぐいでやしたマアはたらいてみやしやう トゆきさうにする 朝」まちなくそしてこうとなおつ いな 稲ぎ ぎよすけ 魚介をよんでくんねへ ふう「魚介さんは成田へたちなせへしたよ 朝」そんなら鬼丈をよんでくだせへ ひで「あつさんはたしか雪よしの出番のしうへ出てゐるはるのうマアよせばへきゝにやりやしやう ト此うち二ツ三ツはな いね「よせばへいつて板をみてきやしたがいゝ子どもしはさつぱりさやうくはたらいておだんさんにおとらさんがきなせへすおとらさんといふナア しんて 新子でござへすがかはいらしい子サ朝さんおつるさんをかりてめへらうとおもいやしたがおつゝけむかひだと申やすからあとをつけておきやしたそしておつるさんはござりやせん鬼丈さんと稻吉さんは今きなせへすいつそあつ トおびのうしろへさしたみ扇をさつてむれの 朝」志よじおいねでなけりやアわからねへといふもんだ いね「又あんなだんごをおつせへすついでねへ ふう「おきさんはどうしたいね いな 村ヶ崎の鯛門屋へめへりやした 朝」出ばんか いね「いゝへ店のしぢやアござりやせん トいふ所へ子ごも出かきりまやうのやぶれからのぞひてみる こればもしさしてはなにかねんのためなり いね「もしどなたもお出なせへし ト二人座敷へ出るおさらはまださしゆかぬゆゑ先へだされる此ささにはかみ座しもたゞせられるふきをつけて見玉へ お虎」十七ばかり紫緞のひさへものふた葉あふひのあづまもやうのふりそでもん所は五三のきりのすがぬひ下にひの板じめのかさねせんさいち寺やごんすのなびかみはふくらびんのかた天神へつかうのつくり物をさす



繩下だけに入がらよし(おだん)二トばかりひねつてたんごちりめんのやまごがきのひごへものもん所きまやうこれほごめ補ひ  
ぢりめんの長じゆばん極上の黒きゆすのおびひごへむすんでさげかみはぐるりおさしのつり舟さしものもよほごめなるお  
しいとにひきまみへ此ころまかけがはいつたさみへてごれもりつばなり〇おさだまりのさかづきすみおさらは祐なりおだんは  
團三さままる〇女三みせん箱もち来る〇たまたし大いそにて三みせんばこのもんを小口へ付る事はよせばにてはやくみわけるた  
めな 久「おめへがたちつとこつちへよんなせへ 朝「おぢいこのとどりのかうしづくりの内は  
なんだ 久「アリヤ男げいしやの寄場よきばさ トいふ所へ鬼丈 鬼丈「一座のつら コレハ朝さんようこん日  
は 通次「あびすの宮のまくでござります 通次「稲吉来る 稲吉「さうだつかけかノ 通「團三さんよくき  
なはへしたの 團「モシ此ごろは本藏といふまくはどうでござりやす 通次「おりへいむさう 通「そり  
よをいつてくんなさんな 朝「おきやアがれ 稲吉「鬼丈さんおめへの髪は夏なつどんかどんだいヨ  
繩下の手やいみな此 鬼「ほれたか 稲「フウやるせがねへ朝さん此間鶴ヶ岡の山の今本であうはさを申  
なつ云にゆはせる 鬼「ほれたか 稲「フウやるせがねへ朝さん此間鶴ヶ岡の山の今本であうはさを申  
しました 朝「稲むら夕崎の白軒はくけんが所へ此ごろにかふ 此間にいるく おもむきありいな吉ちよつこしたも  
やく二人あがりさなり座敷へはいる一人は(近江屋小藤太)四十四五ぐらいいさんさめまのひごへものきぬのをし小もんの  
ひごへをりつむぎまのおびよき酒みせのひ出しさみへるふう一人は(八幡屋三郎兵衛)廿七八つよそうな男くりむめのも  
めんひごへもの花色ぐん内ぶさりのおび花もうせん(まへ)だれをたまんてかたにかけ釘木を髪へさすかまくらゆきあひ川の  
酒店軒店あたりのわかひしゆさみへるふうこれはけふふたぐらへりなり(三郎兵衛)はさしきのこの間へいげせんさいに  
まりをまくつてこしをわけて来る(小藤太)はたつ ひさ「ついでねへわるじやれを志なせへすな 三郎「やかま  
てある所へ(女ひさ)茶を持って来る(三郎)だきつ 三郎「やかま  
しいは ひさ「けふは藏くらだししかへ小藤太さんどこで三郎さんとおちやひなすつたへ 小藤「翁おきなそば  
から一ツしよにきた大ぶにぎやかだの ひさ「こゝとも五ツ座敷サけふはだれをよびなはる  
三郎「ちぶ屋のおまげをきいてみてくりや 小藤「げいしやをだれぞ ひさ「太夫しかはをりしか

へ 三郎「おきなそばはなはらばをりさくまなじくならちみんがいに 三郎「おれはいしがア  
板をみてきやまやう小藤太さんのもだれぞうつくしい所をみつくるつてきやしやう此ごろはこ  
んなににぎやかかな日と又ぐつとひまな日かあるからうつかりと買こみもならずこんなだと手こ  
づりやすかひこみさいふはむはんしやうぶ 三郎「むかふにかつてゐるあ なんだ此額の繪はえぼしをかぶつて  
舟にのつてるのきんり様の舟まんぢうださうだ 三郎「すきなとをいへなへエますと行 娘むすめぶさか  
持て 三郎「けふはわづかの駄たで大きに手間をとつたうはつきのあるやつはみんなたして香かつきの  
やつはなをしやへやつた うはつきは酒のへつた事 ちつともいくやつは鍋町かすじけへか来たら門  
前にたしかふとおもひやす もんぜんさにはたきばなしにうるさいふとたかふ ときにこう爰の内へ北條の  
おやかたがくるじやアねへか 八重「わたしどもへはお出なせへせん 三郎「そんなら化粧坂けわさかへば  
かりいくだらう 小藤「コウ三ぶ公舟の来たにしちやアでへぶたけへのう 三郎「おたじのかはい  
た所だからやすくはうりやすめへなんぞたしなすつたか だしたすつたか 小藤「雁新かりしんの手めへをち  
つとばかり 三郎「どうたしなすつた 小藤「三ぶがそで 判はんの分ぶんさ トゆびを三郎「かつこうもんだ八重「モ  
シお一ツおあがんなさいまし 三郎「一ツうけてのみ 舌うちをして こいつアあんまりあめへ かへだらう か  
あらはちつとわつてくんねへまたが三河へ水をかめちやアあやまるせ 三河ものへ水をわるとけんび  
かめるさばみつを入る 小藤「そんなとをいつたつてつうじるものか 三郎「ト云所へ きたりモシへ三ぶさん夢の  
事酒だなのつう言なり







へ「何サまんざらでもねへはな 朝」さうはにらんだてコウ團三てめへもおつう本よみをした  
 な狂言がおさまつたどみへるぜへ 團「何サわつちヤアトロくどやらかしやしたそんなをい  
 つておくんなせへすなわつちが身のうへでござりやす役者の通言 朝比奈さんこじヤア男げ  
 いしやはいくらだやつぱりおなじとか 朝「何男げいしやは一分サ 士」鳥羽瀬のげいしやもこ  
 へよばれるかへ 朝「ソリヤ鳥羽瀬をこへもこのを鳥羽瀬へもよばれるのサ其かはり一ツで  
 二ツになるのサそしてこじヤア子ども。羽をり。といふが鳥羽瀬じヤヤつぱり。女郎。げ  
 いしやとどなへるによそれよりまだわきにねへめうな事がある鳥羽瀬のみへきなぞじヤア子ど  
 もやへくる女かみゆいの外にゑりばかりこしらへにくる女があるそれで渡世とせになるのサそいつ  
 をゑりのおばさんどつけておくわな 士「ハテかはつたのだのトはなしのこころへ船頭 久「来もしへどふなさ  
 りやす 朝」もう一きりあるつもりだ 久「それもよふござりやしやう 朝」稻きもなをしてやらつ  
 せへト小こゑ おぢいおつるもくびは相應さうさうだが一ツかふな棒ぼうだぜかるやきをうしほ煮にきたやうな  
 女郎だちつと又かしをけへやう 久「御めへのやうなものあきを志なさるお客はみた事がねへ  
 團「久しいどうけをいはつしやる トいふ所へ三人ゆかたにきかへて来る（おつる）はもめんちやみのしまのゆかた（お  
 入のまぐれ小ものゆかた（いな吉）もきたりなをしざかなまご出る此きやく折（り）やうりばんにはづむゆへだしものはき  
 つけて出すやう又さへかへつてにぎやかになりさかづきまはり娘ぶんや女入かはり立かはり来れども事まげればりやくす  
 いな吉」モシ朝さん此ごろに芝居へつれてお出なせへせんか つる「ホンニわたいらもいきてへよ

トをびへ手をはさむもき「いふ所へ女奴をもつてきていな吉にわたすいな 團「何かおもしろさうなとね いな」な  
 つひ此ささのくせし「吉ひらいて見るみすのかみへへにきて書た奴なり  
 アにけうでいぶんの所からきたのサ つる「これ」にごりが いな「さうサ 朝」志かたでするふ  
 ちやうもふるい〜よせ〜ト此うちおさらおだんは初 會だけだまりんでゐる 朝「コウおぢい此ごろは鳥羽瀬はどうだ  
 久「あつちもにぎやかさゆふべもあきやくをつれていきやしたが舟宿部屋までふさがつてごし  
 きがなくつてけへりやした 團「コウ青砥屋かんがどうせへい〜一ツのみねへといふ所へ おひ  
 で「あさいなさんおめへさんはこれぐみだからにばなといふ所をさせやしたサアこれを一ツお  
 どんなせへやしトたかつきにちちやの松かぜんべいこはく 朝「こいつアありがてへゑちごやの松かぜ  
 せんべいときちア竹むらのもなかの月といふもんだ つる「朝朝かみへ口をつけ 朝」モシけふはどうぞまはしに  
 ちかづきになつておくんなせへし 朝「しやうち〜」

第三回

戀こひ情なさけの中裏なかうらとて大いそ通つうに去られしはうら屋住やまの小路にして妓家軒こゑやのきをつらねつゝ棟むねをなら  
 べて櫛くしの齒はを挽ひくにひとしき人出入片かたときたへぬ駒下踏こまげの音ねは寄場よせばにかしましき夫が中にも鶴  
 といふ字を鏤うしたる竹籬たけすたれかけたるは舞鶴屋傳三といふ妓家こゑやなり 内には（居候）惣ごうこをみかいてゐるそ  
 んで申ふくをせん下てゐるこちらには（子ちよく）金魚鉢長谷觀六「来りおやかたはおやどか 居候」アイおられます  
 の水をかいてゐる折からかまくら朝いな切通シの判人



てい主傳三通俗すい傳をよみかけてひるねしてゐたるが目をさましチイ觀六さん御出 觀ときにい奉公人がありやすからきやし  
 た突出つきしたがどをりはよし身の志ねへなさアどうせいにいゝ女だこをりさは鼻す下の事身のまね傳此  
 節さうほうこう人もほしいがわりい足でもついちやアいねへかノ 觀何サ根をよくたいして來やし  
 たいさくさのねへのさホンニ此ごろひとりとなすつたじやアねへかおや判かへよび出し判は  
 だれを入なすつた 傳二人リ取たがきねへひとりは四五日つかふとゐんばらむしをやみだ  
 すひとり髪どやでひつこんでゐるはなつきたしの子ごもはめんばらむしといふをよくやむものふのりをせん  
 そして其奉公人はどのくらいのものだ 觀五年で金ノ五まいぐらゐといふあたりサマアあした  
 あたりみなせへ 傳あしたは勘定日だ 觀あし奉公人だから早くどらせてへ 傳仕切あけに  
 せずおはんに親判ををすだらうの 觀ばんばの忠太がほうこう人だがなんなら親からそへ證文を  
 どつてあけやしやう相だんができたらかけをばちつと付てくんなせへかけさかげにて 傳そりや  
 アどうもしやう 觀そんならあめへみてからむなぐらの五兩もかしてくんなせへ 手つけ金の  
いふ此道 傳それともよくあらつてみてくんねへ 觀きづけへ志なせへすなあらひかたはぢよせ  
 へはねへわたしだからふみ玉なんぞアつかやア志やせんはなト觀六はかへる〇ふみ玉はあさでいさくさ  
の子供(あてう)ニ 傳おてうちよつときや トおくのせうトをたてのあほほうこう人の事なり〇折ふしかへ  
いよりてうづに下る 傳おてうさんつるがをかやから口がかゝりまし  
 我の五郎とやらいふ客をよぶ事はどうにきいてゐるからせいてよけりやア五朝の茶屋へとはつ

第四回

てあはせぬ事もまつてゐるが外の子ごもにヤアきかされねへと長家一ばんあきねへをよくして  
 くれた手まへだから今まで大目に見てゐたが此ごろはさしをついたり寝たりすると茶屋のひや  
 うばんもわるくコレ黒木くろぎの客もされたげなのきけばその時宗ときむねとやらいふきやくも内をかぶつて  
 あるさうだがハテすへへコウアトおもふ心があらばもふ一年も志んぼうしてをれにちつと  
 いきをさしてくれろあれも男ださうすれア半年や一年のねんきはくれてもやるさうして手めへ  
 が地めへになり其男とひとつになつてかせぎやア又あれもせわをしてかへへのひとりもするや  
 うにしてやる手まへもまつてのどをりおれも長屋で相應に口もきく玉をあづかつて土地どころ  
 の世話せわもまてゐれば内の子供が萬一のとでもありやア長屋中へおれが顔がたゝねへナきこへた  
 かがつてんがいつたかトふく清もごきのおだんまはしのさいちうおもてからおてうさんつるがをかやから口がかゝりまし  
 た

女ひでまへだれで手 朝比奈さんモウおかへりなりますかへ 朝此ごろにきやしやう みなく「さ  
 うならどなたも御きげんよう」をふきながら 十ちつと風が團でやしたね 朝おぢいのつきれやうかの 久氣  
 づけへはどざりやせん(朝)(十)(團)はしををりる女刀かけくるみ持てきてみせる祐なりわきざしをみわけてさすお  
(朝)はしををりる女刀かけくるみ持てきてみせる祐なりわきざしをみわけてさすお  
くつらばんづけを書た札のついでるはきものを持てきてなす娘ぶんな女なご川岸までおくつ



てゆ(つるがおか)ポチウ(これよりやぶんのていはいはしまり)女「サアおあがんなせへましな 五郎(おもてのくまりから)内(さやうに御らん下されましやう)宗(宗云きやく来る)女「チャ五郎さん  
 内にでいなせへすヨ 五「そんならあどをつけておいてくだせへ表(おもて)の島山屋に友だちがきてあ  
 るから其うち付やつて來やう 女「モシマアそれじやアおてうさんのめへゝわるふござりやす  
 五「いゝやうにいづつておいて下さへぞきにいつてくらア ト(いへども)女(ごま)志(ま)やう(ち)せ(す)む(り)に(ひ)き(す)り(あ)  
 なりかへつてまだ出しものや三みせん 五「そんなら今のうち八もんじやの湯へはいつてあせをながし  
 箱(の)の(さ)り(ち)ら(し)て(あ)る(さ)し(き)へ(は)い(る) 五「そんなら今のうち八もんじやの湯へはいつてあせをながし  
 てこよう 女「そこらをかたづけ よしなせへナそんな事をいつて又おもてへいきなばるだらう性わる  
 を志なはるとおてうさんにいつつけやすよ 五「はかれてまひづるやの(か)へ(お)て(う)さ(ふ)る(き)中(に)て(こ)の(内)へ  
 はたへそれ(さ)げ(ざ)ら(れ)ま(す)お(も)ひ 女「おてうは 女(が)ま(ら)せ(し)ゆ(へ)さ(し)き(を)あ 心(ま)ち(を)し(て)あ(た)に(な)せ(お)そ(か)つ(た)  
 わざ(さ)げ(ん)き(に)て(あ)る(さ)ほ(ご)なく 五「おてうは 女(が)ま(ら)せ(し)ゆ(へ)さ(し)き(を)あ 心(ま)ち(を)し(て)あ(た)に(な)せ(お)そ(か)つ(た)  
 五「志よけへか てう(さ)う(さ)も(ら)つ(て)も(い)が(も)ふ(今)に(む)け(へ)だ(か)ら(は)を(り)し(て)も(よ)ん(で)あ(て)く  
 んねへとけへもいきなさんなよコウおふさごんはかりだがのたばこと紙をおばあにさうい  
 てとりよせてくんねへごしやうだにヨ ト(又)ゆ(く)長(く)他(の)さ(し)き(に)い(ら)れ(ぬ)が(す)べ(て)大(い)の(法)なり 五「其(さ)なり(さ)  
 やくはかへつたがまだむか おきつ「ソレヨわたいがてへこに出て志かもそのばん雪よしで一座ア志たア  
 いのかしらぬ子ごもさみへ おきつ「ソレヨわたいがてへこに出て志かもそのばん雪よしで一座ア志たア  
 なおたね「チャ、それへホンニあの扇(あ)谷(や)の末廣屋(ま)に(お)ん(ぞ)う(あ)ろ(し)が(有)さ(う)だ(が)あ(め)へ(ど)う(す)  
 る祝儀(し)を(や)ら(ざ)ア(な)る(め)へナル升(の)一(で)よ(か)ろ(う)か(の)出(ば)ん(の)飼(を)お(ほ)へ(て) 二(に)分(ぶ)狂(きやう)言(げん)ではおそれるの

う きつ「わたいらア此(こ)ころは大ひつ天(てん)でさしものもみんなやつて志まつた志きだころされても  
 ねへ たれ「うさアねへホンニおいらアもうあしたアさはり用事(ようじ)をつけて引こもうこれじやアで  
 られねへ(さ)は(り)を(ふ)か(く)み(る) きつ「なるほど奉公人こんじやうとはよくいつたもんだよわたいらもか  
 へでいた時にやアむしやうに引こんだがぢめへになつたら一日もよけへ出てへ た鳥(た)よく(け)  
 はみぢんもねへの ト(わ)ら(ふ)所(へ)へ おき「何へこむ氣がちがつたさうだツウ(ツウ)う(れ)い(し)心(い)き(だ)ト(何)か  
 いかすてせりふをおきつさんちよつとろをむいて見せなおめへの髪(かみ)はとんだすいたかつかふだ  
 いひくきたる おきつさんちよつとろをむいて見せなおめへの髪(かみ)はとんだすいたかつかふだ  
 よたれがゆふありたさんか きつ「何わたいらが内へはあつよさんがきやすはな おき「あつよさ  
 んはたしか表(おもて)へもいひにいくのう鳥羽瀬のおよめさんもよくゆふよ きつ「ほんにかへ たれ「モ  
 シへおむじさんはおきやくがきたかねへ おき「何サぬすみに出てるなはらアな ト(い)ふ(う)ち(に)手(あ)  
 いし引 ト(い)ひ(な)が(ら)立(て)行(く)ぬ(す)み(こ)は(ま)まつ(て)あ たれ「此(こ)ころ隣(とな)へ大(お)瀧(た)から(い)し(に)き(て)あ(る)子(こ)は(と)ん  
 だ大きなかほをするによどこぞしやアへこむだらう きつ「ウ、ヨわたいらアまだ一座ア志ねへ  
 が長家中でさういわアなそれでもよくうるさうだだまはすのう たれ「犬兵衛さんがまはさ  
 アなホンニそりやアさうどあしたア雪の下へをださうにヨ きつ「一しよに状(じやう)づかひにもたし  
 てやらうはな ト(一)人(は)下(へ)行(く)町(で)は(あ)づ(か)ひ(さ)い △(こ)な(た)の(さ)し(き)に(は)お(て)う(そ)の(五)郎(が)き(て)あ(る)う(へ)な(ら)す(心)  
 すたび(ら)う(か)へ出(又)蚊(屋)を(く)い(つ)て出(さ)名(は)梶(原)源(太)つ(か)ま(へ) コウ(ぞ)け(い)く(の)だ てう「ちよつと手  
 うにする此(こ)きやく(き)は(ひ)は(だ)の(半)通(さ)みへ



水にいつてめへりやす 樗<sup>き</sup>なんだこいつアとんだまびんじヤアねへかさきつからたびへ出る  
 がわりヤアせつちんへとうもろこしのくひかけでもわすれて来たのか てうおめへさうあじに  
 ちもつてくんはなはるこたアとせへせんさつき二三度出たナアあの 樗<sup>き</sup>やかましいわへトおき上り  
 ○三四へんあらつたおの川<sup>が</sup>まのかしゆたのつんつらみトかいやつをうてまくりして竹口<sup>は</sup>つたけい 大あぐら  
 らばりのませるで薄紅梅<sup>さい</sup>さいふ一きんで一分二朱ぐらいもするたばこを一ツぶくのんでちよいさはたき これへわりヤ  
 アありやうば初午<sup>はつご</sup>の晩<sup>ばん</sup>の狸<sup>たぬき</sup>をみるやうに氣<sup>き</sup>ばつかりあしにさせヤアかるがひつてんな客とみて  
 あしくするの加但<sup>かたん</sup>しかまくら沖<sup>を</sup>でとれた通り者<sup>どおりもの</sup>を喰<sup>く</sup>つた事がなくつておそれをなすのかおらね  
 へが近江<sup>みえ</sup>の湖水<sup>みづうみ</sup>へ目<sup>め</sup>だかをはなしたやうにあつけにとられるきむすこや夕顔<sup>ゆがは</sup>の暑氣<sup>あつめ</sup>あたりとい  
 ふいろの青い出番<sup>いしげ</sup>のやつらをとりあつかふとはあてがちがふぞ鯛門屋<sup>たいもんや</sup>の芋<sup>いも</sup>のにへたもおらねへ  
 でいゝかとおもつて宵<sup>よひ</sup>から菅次<sup>すがぢ</sup>が内のたばこぼんより高いつらをしヤアがるが大かた内じヤア  
 出<sup>い</sup>しッこをしてこしらへたきらずに鯢<sup>ひしこ</sup>の汗<sup>あせ</sup>の中<sup>なか</sup>へト袋三文<sup>ふくせん</sup>のとうがらしをふりかけて小びん  
 から汗<sup>あせ</sup>をかいてくらうだらう てう「モシへまあおまづかにしておくんなせへやしわつちがわるか  
 アあやまりやしやうあんまりでござへすけしからねへ 樗<sup>き</sup>なんだけしからねへけしがからけり  
 ヤアナとうがらしやわさびはナかぶをうつて裏店<sup>うらだな</sup>へ引ッこむはこれわれヤアマあ何屋<sup>なにや</sup>から出る  
 奉公人<sup>ほうこうにん</sup>だたいし名<sup>な</sup>まへ出居衆<sup>いでいしゆ</sup>で亭主<sup>ていしゆ</sup>をすぐすのかウ、きこへたアさつきからたびへ廊下<sup>らうか</sup>へ出  
 るがなんだな客<sup>きやく</sup>がきたからこつちのあくのをまたせてをくのか經脚屋<sup>きやうしや</sup>の達摩<sup>だま</sup>か宗十郎<sup>むねじゆらう</sup>が似顔<sup>にがは</sup>じ

ヤアねへが横目でにらんでもやるもんじヤアねへは是<sup>こゝ</sup>から一ばん胸<sup>むね</sup>わるでおれがけへきりこ  
 んくらべだマアさうおもつてむかふの野郎<sup>やろう</sup>にも往生<sup>わうじやう</sup>させ身上<sup>しんしやう</sup>へ繩<sup>なは</sup>を付<sup>つ</sup>て引<sup>ひ</sup>ずつてきてからまつ  
 てゐろといえかういつちヤアほんのこつたがお袋<sup>おふくろ</sup>のまたぐらからぎやつといつて鎌倉風<sup>かまがらふかぜ</sup>のひよ  
 り下駄<sup>げだ</sup>をはいてからさかわ川の猪牙船<sup>ちよがふね</sup>で鶴ヶ岡<sup>つるがおか</sup>の八まんさまへ宮参<sup>みやまゐり</sup>りをして稻村<sup>いなむら</sup>ヶさきのざる  
 そばといつて屋<sup>や</sup>のうなぎでそだちたまごの四角<sup>しやうかく</sup>を枕<sup>まくら</sup>にして女郎<sup>やうらう</sup>の實<sup>み</sup>をふとんにまき晦日<sup>くわいじつ</sup>の月の  
 屏風<sup>びやうぶ</sup>をたて十二<sup>じふに</sup>の場所<sup>ばしょ</sup>から七<sup>なな</sup>五<sup>ご</sup>分の場所<sup>ばしょ</sup>かけて隅<sup>すみ</sup>からすみへ寢<sup>ね</sup>げへりをうち正月<sup>しんげつ</sup>の初勘定<sup>はつかんだい</sup>  
 から買<sup>か</sup>はしめ一年<sup>いちねん</sup>中の客帳<sup>きやくちやう</sup>はをれが表徳<sup>ひょうとく</sup>でよごさせ大いそ一<sup>ひと</sup>をりの夢<sup>ゆめ</sup>はみつくして脊<sup>せな</sup>にヤア  
 舟梁<sup>ふねりやう</sup>の魂<sup>たまご</sup>がいつてる梶原<sup>かぢはら</sup>さまだこの出居衆<sup>いでいしゆ</sup>勘定<sup>かんだい</sup>は一ッうつていくらッ、子供<sup>こども</sup>がつかふ床屋<sup>どま</sup>の  
 そんりやうはどのくらいな床<sup>とこ</sup>でいくらするといふとも茶屋<sup>ちや</sup>のさんばしの鳴子<sup>なるこ</sup>の札<sup>は</sup>にどこの内に  
 は何流<sup>なにりゆう</sup>で何屋<sup>なにや</sup>と書<sup>か</sup>てあるときまでづつうにのみこんであるのだわへなんだのかだのと上手<sup>うで</sup>をつか  
 ヤアいゝかと思<sup>おも</sup>つてすつばんのうち首<sup>くび</sup>をみるやうにあんまりびくゝ志<sup>し</sup>ヤアがるな トだんゝこ  
 なるゆへおてうあきれけへりもばをばらげていろゝさなだめてあるさころへ下<sup>した</sup>から此<sup>こゝ</sup>きやくをのせてきた舟宿<sup>ふねどまり</sup>や女<sup>め</sup>ごもが  
 きてよつてたかつて立<sup>た</sup>こがしにしてやうゝかへしてまふあまはひつそりさなりは下<sup>した</sup>めて外のさしきのわらひひもきこへ  
 るおてうはす々に五郎<sup>ごらう</sup>が てう「とんだ毒氣<sup>どくき</sup>をふくばけ物<sup>もの</sup>もくればくるもんだぞやうゝまるめてけへ  
 方<sup>かた</sup>へ出<sup>い</sup>なかりにして出る  
 しやした 五<sup>ご</sup>アノ客<sup>きやく</sup>は大<sup>おほ</sup>ぶまつたかぶりをならべたナアどこぞじヤアいはうと思<sup>おも</sup>つて内でふく  
 してをくだらうなんのとはねへ石苴鉢<sup>せきせうぱち</sup>で鯨<sup>くじら</sup>を飼<sup>か</sup>ふやうな太平樂<sup>たいへいらく</sup>だそれにてめへのかけ引<sup>ひ</sup>が氣<sup>き</sup>か



きかぬへからこゝできぬてゐても日よけの穴あなから狂言きやうげんをみるやうでぢれつてへ てう「ホンニサ  
 此ごろとやを志まつた新子かなんぞのやうにこゝのうちのめへもかつこうがあるふどせへす  
 ゑんぎなをしにぬをつきりをついでくんなせへし 五「よせへ又志やくをおこすだらう てう「一  
 ツぐらぬはいゝわな 女メふき」來時宗さんちやづけはへ 五「モウこんやは喰ふめへよ折なから下女メ  
 で「モシへ大たかやへちよきを一そうこせへさせてくんなせへ馬入川ウマノカハの志ほぞめまでだよそし  
 て起番おきばんはひとりでいゝよ今夜はとまりがすけなから トいふこへがきこへるこれ四ッあけのせりふの〇大た  
 入の船宿ふねやどなり又おきばんさいふは △かみてここがまはり(五)てうはさこのうちへはいる(てう)はさしが十八ばかりあらひ  
 北國きたくにでいふねすのばんの事なり かみをさしげのままだにわらでゆひつげのちいさなくしをちよいとおつちそう  
 にさしまへがみの所へぎんのみとみ花いろのゆすのおび白ちりの下おびたはし是は着かへたなりこいつは五日勅定ていじやうに三十もうり  
 しやうはすばだにすき屋やちのみ花いろのゆすのおび白ちりの下おびたはし是は着かへたなりこいつは五日勅定ていじやうに三十もうり  
 つめるさいふ奉公人ほうこうにんなり(五)もまださしはいたつてわかくにがみのある色男いろおとここしらへはあのみぢんのめんちりのゆかた無地の  
 コンはかたのおび下おびはこんちりめんなり(てう)はさこの中にはらばへになりましましんごのみの玉たまのきれてこしらへた小サ  
 なかみ入なの中から黒ぬりにしたうぬぼれかきみを出して 五「コレてめへ指の輪ゆびわはうらみだせもうやめにまろ  
 みながらかんざしでまへかみのほつれをなをしてゐる 五「コレてめへ指の輪ゆびわはうらみだせもうやめにまろ  
 あどなげぬへ紋所もんじよはなんだドレみせろ てういゝようつちやつておきなよモシこりうふみれさ  
 んなよ守りだよ 五「なんの守りだてふ鳥羽瀬とりはせのむかふの秋葉さんから出る災難さいなんよけのまもりさ  
 ト云所へまひづるやからおてうがくすりやせんてよ てう「コリヤアおひさどんはかりだよどてもの事に  
 こしたるをくすりやくわんのまゝ下女ひさ持くる てう「コリヤアおひさどんはかりだよどてもの事に  
 もひとつたのまれてくんなおらが内のおひらさんがあいてけへるならのちよつとこゝへ顔をだ  
 さしてくんねへナ 五「アイさう申まをしやうとゆく 五「番ばんのくすりか てう「まりやせん 五「批ひ把ば

葉湯はたうだなてめへのゝむにやアいゝくすりだ てうにてさ なく おひら「來おてうさんなんだへ  
 てう「おめへうらみなもんだ兄弟あにぎぶんのやうでもねへ宵よツから五郎さんがきてあらアナ ひら「チ  
 ヤわつちやアけへしぎ志しらなんだ五郎さんよくきなつたの 五「でへぶこんやはまじめだの  
 てう「ちよつとみゝをだしな トおひらに おめへうちへいつたらのソレおれがくし箱はこの上の引ひだしに  
 くしがあるからのあれを深本ふかもとへもたしてやつての二兩にりやうかりてのたばこ入いの中へ入れてたばこの  
 つらでよこしてくんねへ又客帳きやくてうを出だしちらかしてあいてくんなさんなよちよせへはあるめへが  
 小ゆひにさとられねへやうによ ひら「ウ、ウ、志しやうちさ五郎さんおさらばへ 五「チイもふい  
 くのか トひらはかへる(てう)たばこをすいつける火かがきへてなし手をたきさう 五「闇羅やみらあたりの女郎ぢやうらうを見る様さま  
 にそんなものをもつなへやすくツてわりいぜ てう「何なにきやくのめへでだすもんか 五「コウこの  
 ころは志かけがはいつたの てう「さうサ茶屋ちやからたのみで志かけがはいつたから地めへのてや  
 いは志ゆかいまけがするどつてさがつてわきへ出るものもあるよ 五「あじなもんで志かけがは  
 いるどにぎやかになるチア トいゝはなしの所へかの金子かね入いてう「ウ、よし、おひらさんに御ごせわで  
 ござへしたといつてくりやそつとよ ト子こちよく モシ五郎さんさつきのはなしのものをこゝへ入いて  
 おくによ ト時宗ときむね紙入かみいの中 五「ウ、どふもそいつがなくつちやアかれこれがらくじやく志ねへ  
 てう「もしたらざアあしたにも又さういつてよこしねへ トいふうち外のさしきもひけて二かいばまんさめる  
 おもてさしきのあたりにて羽はりのおゆまがこへこ



おぼし メリヤス萬ぎく「宵はまちわびわくせきとふけてみれどもまださゝごとの  
 どのぬをさだめてみたであらう てうくわしくみやしたよけふもけふとてだんなさんがいやと  
 いはれぬもつともなるけんはきけどわつちが身のうへも何をかくさうべつこのかすがへり志  
 かけぶんこがかるくなつて此さしものもきたものもみなそんりやうのつがふものおまへの身の  
 うへといへばだんくのあのわかちはてどうするもんでごせへす此からだをつきだして 五「主  
 人のざりも てう「おまへにみかへて 五「そんなら晝のぬのをりにてうにげやしやう 五「ウ。  
 コリヤ

仕懸文庫畢

追加

前に許多の小冊出て此大磯の地に於て妓客の情至り盡せり雖然コンコ  
 ーリキコ、マカリキの時代にしてはや十年の物換星移よくいふもんの上  
 ミ下モもいつしか着ふるしてわづかに吹物椀の袋とはなる古今人情かは  
 らされど風のうつり俗のかはるは息の強ひ吹矢のとく昨夜の鬢さしの翌  
 に翻かごとく流行のばやきは都て烟花のならばせなり故に今再び此地を  
 穿鑿して十二錢目の筆のはりみに三錢目の胸のうはをくはへ合て以て  
 一部の書となす猶予か穿のいたらざる所は此地の博子のくはしきを待而  
 已



跋

河豚羹を不食愚鹵あり。くふ癡呆あり。くばぬ愚味は美味を不知。くふ素痴は有毒を去らず毒あるを去らずして。くらふ人は論に不足。美味を去らずして。くばざる人は一概にして危し。不佞京傳。嘗好色淫蕩を著述すといへども。實は前に美味あることを述べて。後に毒あることを示し。戒を垂がため也。不如美味を知り毒を去つて恐慎には。河豚はくひたし命は惜しとは。豈此境を悟したる。君子の言といはんや。孔夫子衛國の糞賣家を過りて曰ことあり。吾未徳を好者。吹肚魚を好が如くする者を見ずと。嗟夫ホンニ。傾國傾城ものは。此鐵炮汁の勢ひにあらずして。何ぞやみづから後に去るす

京傳

通言總離叙

彦國佳言を吐こと。鋸木屑の如く霏々として絶ず。粵に京傳青樓の通言を酸瘡に呑こんで。頓に茶表紙の一冊を吐。是鐵拐が仙術にあらず放下師の小刀にあらず。閱之象牒中に顯れ聽之文面にとゞまる。闇に引出す牛臺の囁迂り。中街に驛る駒下踏の音耳にちかし。實にも籬といへば。朝顔の泣腫たる清楊に昨夜の疳癩を殘し。二十七明の長を慷慨ては花の蔦を愁ず。逢夜の短を悵望ては穠久しき花を羨。且くの笑顔晩々の泣顔も。色無垢の衣領にさし入たる容に。鼓子花の閃屍も壺盧の色白なるも纏ひ咲。總離は善花街に通じて然も花實相對し眞に腸を斷。我かの籬の下に店三絃の一子を打て。番新の萬を知るに至らずといへども。二と三の緒を肇。猿人郷と共に京傳を愛の一曲を唱て。糸巻をチトひねるこ



と爾しかり

文きやう自書

自序

我嘗ワレカツテいへること有アリ。青樓セイロウは家爲ウケタメの雪隠セツカンなりと。夫如何ソレイカンなれば。持モツたが病ヤマロの腹痛フツツに腦金尿ナヤミカチジンをひらんが爲タメ。尻シリをほつ立タテて。此鄙コソサトに通カヨふこと繁故シバキガエナリ也。若貧客モシヒンカク我尿ワレカクを喰クラは。薑黃金マチマチコガチの唾ツとやらん。一イチ日例レイの長尿ナガジンに退屈タイクツの餘アり。此妄作書コナムダガキをなしてかた尿カタカクの堅カタキをして。びり尿ビリカクのずるきに和ヤらけ。世に其尿ミカクの撒様ヒリヤツを傳ツタふ。通客ツウカクといふとも我勝ワガマシクを視シずして。何ぞ尻シリの穴アナの廣ヒロキことをしらん。吁尿ア、ウツが憫アキレにあらずや。于時トキニ天明七年丁未孟陬テイヘイモウソウ

山東屋のひとりむすこ

京はしの傳述



通言總籙凡例

○此書ハ論語ニ所謂。損者三友ヲ以テ大意トス。蓋總籙ト題セルハ。流行ニ後タル古句ノ。雜死ヲ以テ也

○艶治郎ハ青樓ノ通句也。予去々春江戸生艶氣樺燒ト云。冊子ヲ著シテヨリ。已恍惚ナル客

ヲ指テ云爾。因テ以テ。此書ニ假テ名トス。氣之介。志菴共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也

○妹妓及雛妓少妓ノ言。其儘ヲ記ガ故ニ。詭ヲ不レ改。假名違テ正ザルハ。其音ノ訛ヲ知シ

メンガ爲ナリ

通言總籙

其一

山東京傳戲作

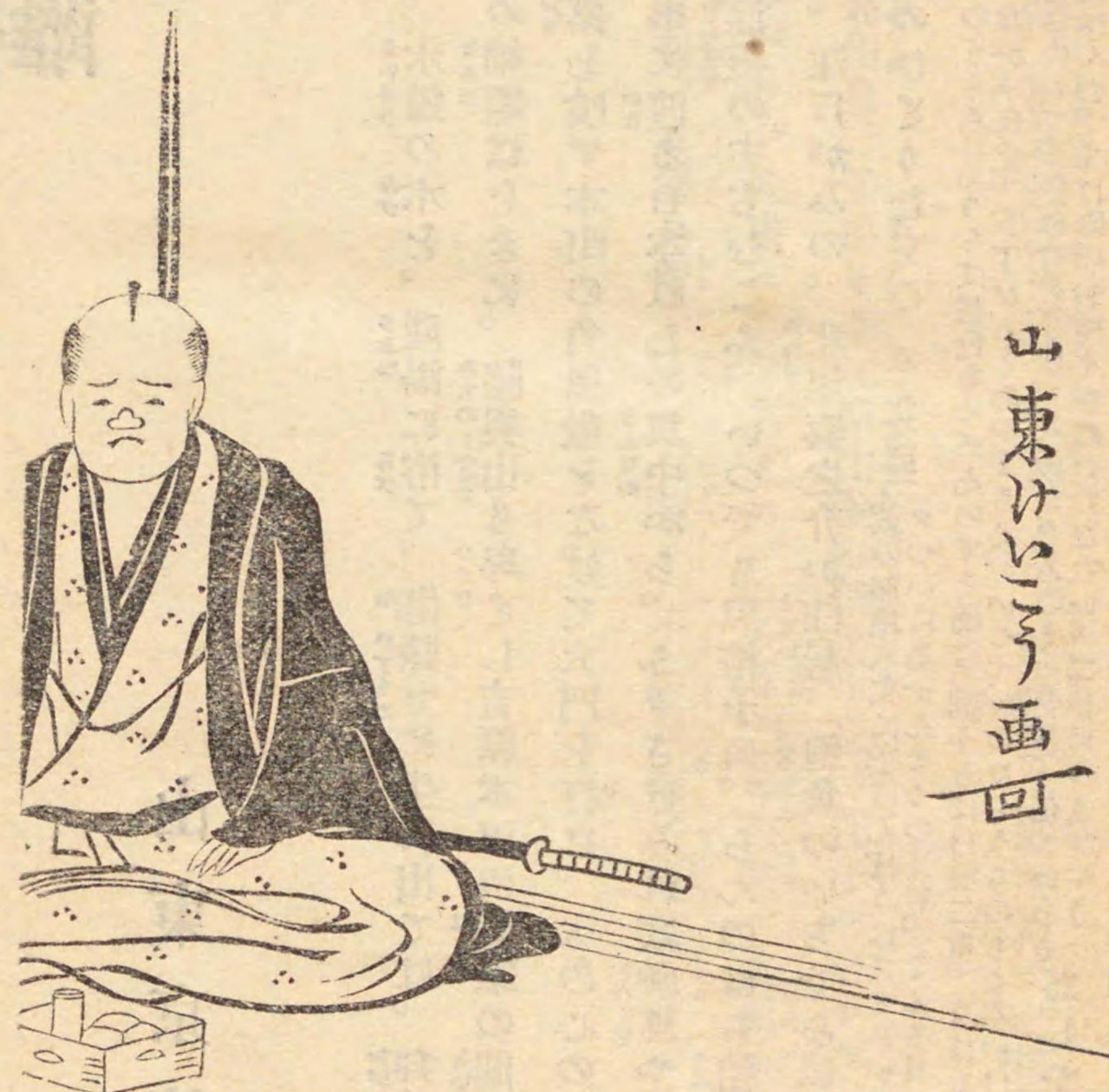
金の魚虎をにらんで。水道の水を。産湯に浴て。御膝元に生れ出ては。拜摺の米を喰て。乳母日傘にて長。金銀の細螺はじきに。陸奥山も卑とし吉原本田の鬘筆の間に。安房上總も近しとす。隅水の鮑も中落を喰ず本町の角屋敷をなげて大門を打は。人の心の花にぞありける。江戸ツ子の根生骨。萬事に渡る日本ばしの真中から。ふりさけみれば神風や。伊勢町の新道に奉公人口入所といふ。簡板のすぢむこふ。いつでも黒格子に。らんのはち植の出してあるは。芝蘭の友を旦那と稱ず。江戸がみの。北里喜之介か住居。鮑魚のいちぐらに同じ門口。くだすだれの外トに。仇氣屋のひとりむすこ。ゑん次郎「黄の無地八丈に。けんぼうにてさめがたの小紋をおいた上着。三ばん。下着はみな黒なこのうらみり。うらはは花色ちりめんのすそ廻し。胴うらは白羽二重。身はひるき仕立。あはせばをりくるの無地八丈。まへ下りながき仕立。五丁ひもくあやまるさかいつて黒のひらうちちのちよんむけ。帯はおなん戸茶ごんすの小もよう。づきんをゑりまきにして。中の町をうり。八わたゆるのくつたび。花わいらさき。おしやうさきへはいらつせのわきさし。かみはよし原ほんだ。すは町のおやどがぬいたひたい。二日めのさかやき。おしやうさきへはいらつせへり。ゑん次郎「たへ出いわるぬまあん」くるちりめんの小袖。おなん茶なこのはをり。酒さびにてはなのさき。喜のぼらうお





通言總離

其一



山東けいこう画回



宿か。えんさんがきさしつたよ。トうちへはいりみれば。あがりはなに女房うのさしづをうけながら。あをちやのはもやけだらけな手でたきつちのなが。小女「こうしているもんだよぢつとしていやア」ごろうじまし。い  
つそうれしがります。女房「つやなしうへた。あぶらじみた小そで。くろなこのほのひろいはんふりこびちやな  
かみはいなむすび。おはぐるをおさしてまらば。これはばんに。おはぐるを。つけやういふしたす。まだ左衛門といふ  
字のつかぬか。此女房むかしは松ばやのさるおいらんのせわしんぞうなりしがねんあけのち。かねて久しいるきやく  
にて。喜之助が女房になりし。かみの毛のうすい所さ。みみの。そのまんま二かいの日あたりへつれていつて  
ほさせや。チャ志庵さんよくおいでなんしたね。えんさんかへ。此間はあ早々でござりやした。  
うちでござりやすは。ト仕けたまご。えん「このうちのながしは松ばやの湯どのといふもんだの  
まあん「本町の棚ななもありやす。喜之助は中ぎりのはしらによりかまつていて。さみせんをまのびごまでひいてい  
下タトめを帯にして。喜之助「これはおそろいなすつて。さあこちらへ。えん「でへぶねむそふなかほ  
の。まあん「きやくをにがしたしんぞうといふかほだぜ。丁子屋だと帳場でまかられたといふかほ  
だ。喜の「ゆふべはつねさんの茶ばんで。升屋へめへりやした。けさ八ッにけへりやして今をき  
やした。えん「つまさんはやつぱり。深川のせかいかのまあん「おみなもごふてきなやつだよ。こ  
のころもどこのか番頭にかへを仕て。もらつたそふだ深川にて。かへをしてるふは吉原喜の「此間  
も御供て尾多喜屋の。およふ。五介。鶴太夫。長二。ちんす。仲吉。などといふ。うぞうむぞう  
を引つれて。むこふじまがござりやした。えん「ときやうさんや。ぶんきやうさんと。ちがつて

青ろうへはほとんどござらぬへの。はいかいと義太夫はきついてもんだそうだのトいながら。こしから。あんべらの。内ぬひ。りうさのねづけの。ついたさげのたご入からきせるを出し。すい付る女房はせんさくの大ばちにかまつて  
いるひろしまやくわんのちやをついで兩人へ出す。喜之助はよりかまつていて。たばらや宗理がいた。きくのほん戸だなか  
ら。豆のほいつた。喜の「これでもあがりやし。トえん次郎が。まあん「えんさんが酒をのまつしやらぬへは。  
んべいさうをいだし。喜の「めいよう今の通は下戸さ。トうれしが。まあん「えんさんやあいのものがある。きの  
玉にきずだよ。喜の「めいよう今の通は下戸さ。トうれしが。まあん「えんさんやあいのものがある。きの  
ふ長崎屋のこはんが所から。隅田川をもらつた。おちせかんをさせや。まかしさかなが何も。  
あんめへすまあん「かん見まいのこぶ巻はなしか。あのなべのはなんだ。えん「よくげひをいふや  
つだおちせ「おいしいものではないさ。けさのおつけでござりやすは。まあん「すつと立てな。おきや  
あがれ。どうふ汁が加むけている。きつい松葉屋の晦日どうふだこいつア。つめたくちやいか  
ぬやつだ。喜の「おうたがひは。はれやしたか。まあん「うなぎをどりにやりは。えん「どうだろうと  
いふ事かもふいぢめるの。トきんからわのまへさげから。な。喜の「青か白か。まあん「やつぱりすぢを。長  
がやぎの事さ。あ。白。す。ト。みなうなぎの名なりうなぎひのつう言。おちせ「早くよ。喜の「ときえんさん  
京町の新造けへの色事も見だしになつたぞやあござりやせんか。えん「それでふさいでいるのさ。  
二かいのうちに。このわりひ女房があるからよ。ト住よしやがはつた青きんこやまがねの。ぬのめぞうがん  
まあん「せんてへ萬ぎくにしよさをつけて。どつしが相手にするから。はいらぬへわな。トちやがす  
られし。えん「けさもあわりやの男が多を持てきたがけいせいも内せうとたて引になつて引込てい



るそうよ。何かあはれなくさぶえ入のうしろてよまうといふ。ふみだつけトふたへつるの両口の引かばの名づをみるやうにみよしへにすりの半切へ書た。あをほり出す。喜之助はどつてひらき。さして書た所からさきをふんでみる。何かいろく／＼なてんをりを書。しよらん中の丁のあい引もきをつけるだろうしわたくしもたて引だから。江戸丁のかたをつけて。いつそはれてきてくれるさ云ふんてい。未にせひ／＼といふ事が十計かいてある。どつばはんしんこのれ合で。まん次郎をいろトかけでふきやうげん此ころはやる手こ。ささつていればきのすけはふさい女郎もおもひよんでひま。喜の「出戀のすへせん何かありがてへ句ね。あの女郎はたしかにはんごろしに仕て置なさるど。仇あなを志やすにへ。まん「やりてがいふにやあ。はれてお出なさるとも一かいを御えんりよなさるともど。かわ羽をりのひもをみるよふに。兩方へくいらせていふかうどふもならぬへ。こふなつてみればふびんだよきついとをきりかけも志めへから。江戸町のかたを付て。いつそをもてむいていつてやらうかとも思ふよ。喜の「そふなされば。きついくどくさまあん「戀つれてむまい所。ア、いろおどこには何がなるトそばにある三味せんをさつて。つめのさきでめりやすをひく。歌「水無月も流れはたへぬ浮世のきしに夜舟こづてふふり袖のかほにまがきのあとつくほほどに。ばでなうきなのてならひもくさめ／＼のやるせなく。おちせ「モシそのめりやすが此ころひろめのあつたすがほどやらかへ。そのあとはどふだへまあん「泰琳たいりんがみやうにふしをつけたよ歌「あめさきめの口べにもはかへうつさぬ心とば。神ど／＼さんもどこやらも。どふにせうちであるけれど合方あははれたしやうこそをいつみしよと思や

かたきしわすられぬわすられぬ身はおもひいだしもせぬほどに。思ふているぞへわしやはんにさつしてくだんせわしが名におのじを付ていつかさて。つくろひのなき夏のふじ。喜の「京傳がいつばいに。うがつた文句だ。まん「かなやの白妙がついせんのめりやすは何にどかいつたつけのまあん「それはなつ衣さ。おちせ「花ぐもりは四代目の瀬川さんの。ついせんだそうだねへ。まん「まへの瀬川はどふまたの。喜の「かんの地の内にいやしたがかこわれたそふでさりやすおちせ「玉の井さんはやつぱり仲町にいるかねあの子もふしやわせたねへまあん「そふだそうさ。ぢめへだそうだから。そふあふな所をみたてに出て居るのだらう。このぢういくよしのおいさに。ことづけをして。よこしたつけ。おちせ「せんでへうわきから。をこつた事さまあん「おめへのやうに喜のさんにじやうをつくした人も。あるにノウ。おちせ「チャばからしいまあん「よしはいらいらいばからしいを。ひさしぶりできいたわへトわらふ。女房はいたの茶ほうトで。まあんをまたくかた。此うちまん次郎は京町のいる事のうねればなし喜之助はウ、ありわてへウ、そうさ。いまかげんにあいさつしている所へ下女はうなきをかつてくる。にようぼうはかんをする喜の「御心安ひからそのまんまだしや。おちせ「チャそれでも。まん「いゝわな／＼。トいふゆへはかまのなまあん「こいつア着ながしのちろりだの。しやれたもんだ。此あいださけになりうなまも。喜の「ホンニ住よし町の川治から。茶入を持ってきておきやした。ごろうじやし。ト戸棚から茶入をニツだしてみせる。土いろまん「こいつあ京がまたはへ。新兵衛か萬右衛門だらう金一枚くらいかの。こつちらはいつかふ



なものでとんだねき物だ。此ちう敷寄屋川岸の伏甚ふしちんから瀬との玉川と瀧波を見せによこしたが。尤遠州の書付があつたが。四十兩だいだ目がでるの袋は白地の小ぼたん。一つは權太夫だつけどれもはくさきはよかつたまあん、此間橋場で江月のよこ一行をみやした一片の雲にしりひんがしり自西自東といふ語さ。ひやうぐもようござりやした。天地はやつぱりふとじけだか。風帯ふうたい一文字はあんらくあんさ。まんをれにゆづつてくれめへかのまあんはなしやすめへよ。喜の「角町の惣六がかうらいの御所丸ごしよまるきんかいをもつていやしたつけ。品川しながはの萬千がもつている松花堂のほていはとんだ出來のいゝものさ。萬千といへばモシまだあめへさんにはなさねへが。柳郊りゅうこうさんが村田屋で大いろごさ。何とかいふ女郎でござりやした。此頃は村田屋の部屋は扇屋といふもので。萬千もあつてもうたをよみやす。まんあそこのその歌といふ女郎をおれがかつたよ新宿からこした橋本は又あつちへかへつたそふだの。おいろといふいゝ女郎があつたつけ。妙國寺の仁王にてうちんがあがつていたつけ。喜の「たいあさのけしきばかりの所だよ。問屋ばで馬のいなゝくには。あやまるて。まん大木戸の石がきにせきだの金のはさんであるのは。なんだのまあんあれは何のかがわんをかけるのさ。まん「おいらはあの土地におひては不通だよ。ちつとたびもしてみやうす。とうじにいつた時賀達かたつか所へ。いつたまよ。喜の「御ぞんじなくつてもな所さまあん」まかしいてきだもきみありだよ。吉原ならつけといけのぬをやろうといふ所へ。臺の物

をおくりやす。喜の「いやもふ臺の物がきちやあゝさわぎさ。こわがるものは鷹匠たかぢやうの御留ごりゆういやがるものは五ツかばりに正めんをはるの。にぎやかなのはるびすこうさ。みこしをこしらへてにかい中をかづく内もあり。めしたき男をるびすにこしらへて。はやしたてゝありくうちもありやす。ぜんでへまろうと芝居のはやる所さ。おちせ「モシまへかたは松ばやでも度々狂言がござりやしたねへまあん」丸るびやなどにもよくあつたよ。おちせ「ぼくがさんが工藤で。玉屋の山三さんが五郎で。大門の四郎兵衛さんがすけ成で。おかしい事がござりやしたつけ。喜の「狂言といへば宗十郎松が六けんのおさくをきれて。ふる石のとよくらへこつていくそうさ。おかしいじやあねへか子エ。まん「あいつが中洲なかつでめつかちの地をくわかつたときほど。おかしいとはなかつたおちせ「モシでへぶきなつくさいよ。さんやそこじやあねへか。まん「ほんに芝居のゆきがらうそくへふつたといふにほいた。それおしやうぬしのはをりだそふだまあん」さあ〜こいつア大さはぎだかゝあにまかられることを仕だした。喜の「もちつどの事でもろせをたのみにいくな所だまあん」しやれ所では子エはな。まん「やけぼこりでのいゝのさ。此間女房このまの手りやうりにて。たまごのあ口のこのかやく梅さけのあんばい。ま。まん「なるほどおまやうはよくくふぞ。ぬす人には極つたまあん」もし松ばやじやあ小梅の青いのを出すノウ。喜の「あれはつけめさ。扇屋のせんべいの。丁子やのてうあしのぜん。四ツ目屋のかすていら。竹屋の水貝みづがひまづか玉屋のえましむぎ。こいらはつけめ



さまあん「丁子屋じゃあねへが。はてなどいしてへ所だ。喜の「はやり言葉もあぢなものだ。ちよつとい、だすとむしやうにはやるよ。此ごろのはやりは扇屋のきかふさん。丁子やがはてな。ぶしやれまいぞ。おたのしみさんす。松ばやがぢやあつせんか。玉やのおにのくび。大文字やの志らアんもよくいふよ。さまといふ事をせといやす。ゑちせんやは志んにといふとをたんどいふね。ん「丁子やの日てんさんと。きれいでさんすよ。松ばやの山寺と。さかことは。いつの間にかすたつたの。喜の「今でもぼうくいていふものは。まつたかさまあん「あぢさんあめへはよくしつてるだらう。大かなやの正月の仕着はなんだつけのちらせ「たしか地が黒で色入の花たてわき。角のつたやが鷹のもやうさ。わかやが若松にかすみ。中あふみやが花ごうしでござりやす。鶴屋はぼたんのすそもやうの時もあり。ひぢりめんの無地の事もござりやす。角の玉屋はぼたんさ。松がねやがさくら川さ。松ばやのくぢやくまぼりと。大ゑびやのほうわうがよくまちがひやしたつけ。ん「あふぎやの十二ひとへ丁子屋の若松にがくはよく人がまつてるちせ「瀬川さんのつき出しの時。いつでもかきれいで入ッはしにかきつばたのもやうてござりやす大文字屋のつき出しはいつでも。どかくさかなのもやうさ。ん「正月元日に禮にでるのは。大びしやばかりだのおちせ「さやうさ。喜の「つき出しの時へやもちばかり。うちへのこるはどふしたわけだまらん。おちせ「あればさわかりやせんよ松ばやはせんてへかてへ内てござりや

す。女郎衆にうはぞうりをはかせやせん今でもはくものは。瀬川さん。松人さん。部屋もちでふたりばかりござりやまやう。そしてれい日にはみんなぞうりさ。くしかふがいても中座迄ぞうりげまきゑでござりやす。さんやでへふいぶるによ。ちつとさしくべればいゝまあん「丁子屋もかてへ内だよ。きやくのまへはうはぞうりを手にもつてとふるの。きやくのこねへ女郎はつるしがとぼると中の町へださねへね。二かいに小便所の二どころ有と。はしごを庭からあがるやうに付てあるは。丁子やばかりだ。喜の「まるゑびやにははしごが二所あるによ。扇屋の小便所ほど遠ひのはあるめへ。さむいじぶんなどはてへぎだよ。半七がかつばを着てどこをまはすも久しいだらけだ。玉屋もかてへうちさ。そしてはやく見せをひかせる内だよ松ばやぢやあね女郎の事をわつちらんどいふね扇屋じゃあぢしきでといやす丁子やぢやあね女郎のそのあね女郎の事をあほきいおいらんといやす。ん「玉屋といへば紫夕しせきが小むらさき將基しやうきはあがつたかの。喜の「こんぢう我物が香角きやうかくのませで。二ばんまけたそうさ。ん「琴基書畫きんぎしやうわをやるきだの。けいせいにもいろくなくせがあるものだ。きさかたが。水かゝみのめりやすがすき。瀬川が茶のゆ。歌ぎくが地ぐちのてんどり。すがはらが梅をたち。わかづるがはいかい。ひなづるが團十郎びいき。松人がどふしたのだへ。丁山がちよつとみな。たき川が三つ七寶しつぽうの紋所もんじよをかへず。九重がかふろの外に男の子をかへておくことなどは。今でのうがちだまあん「こんぢう今戸の



墨賀がりやうへめへりやしたら。いづゝ屋のせつづい。くわれき松屋のきよみんいづみやのこゑん。いの字いせ屋のせいら。長崎屋のこはん。おはりやせつ久。かんぼくといふいしや。そらまやうのとりう。などがきていて。梅枝點ばいしきんのがばらが事ことはいかいをしていやした。いなぎも源氏の書入にこつていやすよ。地内のおたみがしんでちからおとしさ。ぼくがもへりに斗りかゝつていやす。まんけふは廿六日だのあさつては三河じまのふどうへいこうぜへ。喜のぼう喜の「めへりやしやう。まん」あどげつのふどうほどけいせいのでた事はおぼへねへ。ノウ喜のぼう。まづきさかたが。たはらやのよしのにしき戸の若づるがでるし七こしがでるし七里がでるし扇屋のうたかたがでる。喜の「岩越もでやした。からこともたしかみかけやした。げいしやもでへぶ見かけやした。あさをに駒次。ありせ。まん」ひやうごやのおくにもきたつけ。なるほどげいしやはとんじやうだ。けんばんにそばがたへねはづだざしきへならでるさけんばまん「もし羅月らげつがいもうどはいづ梅と。やうじやのあいくを。そうじめへにしたといふかほだねへ。あれでうすいもがねへといへ娘さ。まん」何いゝものかうすいも所か。ひめじかわの紋がらといふつらだ。ときちよつとよつて大ばなしになつた。ちよふとじぶんだの。もふ晝みせのおみきどつくりもひけたらう。喜のぼうあいばつせへ。こんやは一町目のつもりだノウおしやうまあん「おぢさん喜のさんをあづかるによ。あれといつちやあふりしんのいちやつきでもさせるこつちやあね

へいろ男のていしを持と心づかいだよちせ「だいじのものんだがあかし申しやしやふトはいへども。此ころよしはらからきたぬを。ちらとみたゆへ。喜之助喜之助はゆかうびやうぶにかつてゐる。若ト喜の一町目さきいてあいた口へもちなり。女ほうはつうゆへいろめにもださず。立て戸だなのかさねだんすのひき出しら。ゆうきじまの上着くまやくまほりにせきちくあられのへりをさつた下着。ひぢりめんの上ゆばん。くろ上田のはおりにこれはまん次郎にもらつたのゆへ。女ほうのつうにておほむき喜の「ちよつとびんをなでつけてくりや女ほうはきにきせてやる。喜之助は着てしまひ。かみ入をふさころへ入レ。喜の「ちよつとびんをなでつけてくりや女ほうはき二分ほどするつけのくしでなでつけ。まあん「歌むすほれし。千すぢをわけてみだれがみ手松ばかんざして。びんの所をまきこむ。まあん」

にどりトの物の思ひ 喜の「おきやあがれおちせ」サアよふごさりやす。あれせわしないまん「このうちの戸だなは。丁山がつぎの間といふもんだの喜之助はゆかうびやうぶにかつてゐる。若をさつて喜の「サアお出なさりやしてまん次郎まあん立おちせ「チヤまあんさんやけあなが目にたちやせもとへいれ。喜の「こふともし四蝶しやうてつさんの所から人がきたら。たつの口へでもんは。モシづきんはよしかへ 喜の「こふともし四蝶しやうてつさんの所から人がきたら。たつの口へでもいつたといつておきや。それもよしこれもしトそこらを見廻しながらかつてへいで何かわすれたやうだはへト少しかチ、それくふくいの町の豊國が所から人がきたら。わすれずに此ちうのやしきのを二分やるのだよトだんばしこの小引だし。こいつもはかなくなつたすトはいて出る。狎跡について出そうにする小女はだまあん「これゆびぬきがをちてるよまん」ちかめがとんだ物をみつけ出したおぢさんいつてきやすおちせ「さやうならごきげんよふ。キツトおつむりがあぶねへ 喜の「サアおさき」

此間柳ばしより大さんばし迄船中のしやれよしはらやうじのふさならであまり長くしけ



ればこゝにもらす

其二

けふ此頃はいたこやかるい澤ではやる時分トキ。きうへ田ぞろにゆかたを下夕着。こひ茶ざやの袖  
くち。もへぎさなだのうら付でとんだあやまりなり西のくぼのがせんぼう谷や。本所のわりげ  
すいあたりで見かけるてあい。くら宿でいやがられるなま通ども二三人。兩方へわかれて土手  
のはしを通りながら。ひとりのにほんどしくわへぎせるをばたいて里風「アレ〜みさつせへ。  
田中のほうから。三まいの早かどがくるが。いまぶんなぜあねへに。いそがせるだろうの  
花囃はなばしほんに何者だろうのこいつはげせねへはへトいふうち。早かどは土手のきはまでき  
つせへ。かつぎもどすせへ、きこへた。あれはたしかかどをかき習ふのだ。里ななるほどそふい  
へば。中にへんなやつがのつて居る。花はななんになつてもならひのいることだの。これ公が所に  
孔方こうほうは少せうくなくしか。小ぎくを一帖てうかいてへ。をればすこぶるすこぶる秋風しゅうふうだて。友とも青樓せいろうのき  
やくが。そんなげびなものを持ものか。きんならいつくらしもある。けいせいせいせいのわるがみを。か  
すりどうしとさつせへな。花はなそれでもかみがねへと。何かふどころがいねへやうだ。馬うまコレか  
みをゆふなら。こゝのかみいどこがいしぜ。こつちらのかみいどこは。へただぜ。友とも此高札場

はよくできたノウ。八十兩かゝつたといふことだ。どふいふもんだらうの。花はなこうとくじのも  
んじやあねへか。トトまやれながら来る。跡よりわるいふあんきたり喜之助きすけのすけまんかにはさまれてゐん次郎じじろ。きたりうので  
く見て。ゑもん坂えもんざかををり。中ちゆうゆびさくすりゆびで。ひたいをくるりさな。○川竹かわたけの流れはたへずしてまかも元の  
でみて。はなをちんさかみ。うはまへのゑり先を一ツひつぱり行する。○川竹かわたけの流れはたへずしてまかも元の  
きやくにあらず。さどにうかるゝむだ人は。かつきれかつなじみて。久しく来る事なしといへ  
ども。つき出しからなじみて年のあくる迄くるきやくもまたすくなからず。何がどふだかわか  
らぬどたゝ人のきをとりあぐる大よせ小よせのくるはの名とりが。すらりとあならびなされて。  
よい中の町の夕景色ゆふけしき。左りの竹村に比して。右側の七けん軒をならぶ。はでな遊びを駿河屋が  
まへ。此時まじめなるらんとしやれながら。門口より。まあん「此間はおせはでござへした。ゑん  
次郎じじろおまやう。むかふの兵庫やに居るのが。丁子屋のつき出した。よつばど瀬川といふばがあ  
るによ。喜の「かほるとは先名がうつくしい。トトいふながら。三人あがる下女げによ「これはおそろいなすつて  
よふ御出なさりました。モシゑんさんがお出なさりましたよ。女房にようぼうおふトトつてより出る。おゑんおゑん茶つ  
女房にようぼうよふお出なさりました。ゑん「主人はどこだ女房にようぼう「たいいまあざしきへまいりました。ホン  
ニ江戸てうから度々お人でござりました。よほどお久しぶりでござりますね。ゑん「久しぶりも  
てへそふだまあん「吉原じやあ四五日こねへと。久しぶりのよふだそふさ。女房にようぼう「モシゑんさん京  
町きやうまち何かおせかいが。おできなすつたそふでござりますね。あんまりおうわきをなされますな。



それでお久しぶりだと申ますのさト三人がこしの物をさつてねへきのさん んん「いんにやよそれにも  
 わけのある事。どふでままいはろくな事には。なるめへと思つて。こつちへはさたなしに志た  
 女房「それはよふござりますが。もし江戸丁へでも志れましてはト少しま喜の「そのおせけへもす  
 んだ事だそうだ。もふこゝ切りの事さ女房「さやうなら。よふござりますすけどもト立て神だなのよこ  
 きざしをかけたしよくだいなさもし手あぶ んん「いのじいせやの二かいにうしろをむいてゐるのはだれだ  
 りをたよせて。盃だいなまん中へ出す。女房「扇屋の扇のさんで御ざります喜の「ぶたいはなれたものさまあん「つたやのさんさう。鶴屋の  
 在原。此春のつき出しはどれもあたりだ。丁子屋の名山を此中向島で見かけやしたが。七越と  
 いふきみがござりやすん「丁子やといへば。みさ山もとんだうつくしくなつた女房「松ばやのを  
 はやく見たうござります。女房「さやうならト酒になる。さびるん次郎へ又盃まはる。女房へさし祝儀 んん「むかふ通るは藤兵衛じやねへ  
 かまあん「藤兵衛へが三人通る喜の「おきやあがれん「コレへ藤兵衛へまあん「でたがねへ  
 藤兵衛へ喜の「藤兵衛ます藤兵衛はまゝの紅葉哉ん「これちつとだまらねへか藤兵衛はいのし  
 藤兵衛「これはどなたかどぞんじました。ごきげんよふござりますかあん「どこぞへ行のか  
 念ねんでござります松藏藤二。三味子や。我物がぶつがまいつてをりますから。ぬけにくうござります。今

晩ばんはやはり一町目でござりますかモシきのさまどらけんはどふでござります喜の「又まかさうと  
 思つて。いそぐならいつてきねへ。藤「さやうなら御めんなされましト何かせわしく又かけて二丁目へは  
 くる跡より歌 んん「おしやうむかふからくるのはだれだと思ふまあん「竹屋の歌衣さ喜の「こいつはき  
 菊きく出でくる。ついで。それでは近眼きんかんとは思はれねへわへ。まあん「顔も提燈ていとうの紋所もわからねへが禿がみゝのわき  
 へ黒い糸をさげているのは歌衣と。大文字やのは丸巻斗まきさあん「あじな所にめきゝがあるの  
 女房「お二人ながら竹屋の千兩箱で。ござりますまあん「歌菊が地口はどふだの女房「もふ一ツあ  
 がりませんか。ゑんさんお茶づけわへん「腹中はらまんへさまあん「もちつとあつく  
 してくんなさへいわしの吸物出る。ふたをさつてみて。喜の「イヤアかもせんば葉付大根。ありがてへわへ  
 まあん「料るもんだよト云所へ瀧川が んん「若わかしへお藤ふじさんに。おいらんでおせへす。あのけさの  
 ふみをどいけておくんなんしたかどのれんをひッば 女房「ム、そふ申てくりや。けさ程三保藏にも  
 たせて遣やしましたが。あるすだと申て御返事は参りませんと。申てくりやトかつての ノウ三保藏  
 御返事はこなんだのう勝手よ三保藏「まいりませんへめなみ「そんならあの。そふ申し志やう  
 女房「ちつとあそんでいかねへかめなみ「志かられんすよあん「コレあの子や女房「めなみあなたがな  
 んどかおつしやるよめなみ「なんでおざりいすへん「おいらんとどふちさんによくいつてくりや  
 めなみ「アイそう申し志やうト云て女房「とんだ利口な子でござります。三保藏や其送り物は。玉



やのたが袖さんのおさしきへ行のだよ。そしてみつさんは七ツにかへらつしやるそうだから。かごやがきたら三てふだよ。肌如二百雪二腰如練素齒如三員二嬋然一笑感陽城二迷下蔡其ふぜい。田丁のかたばみや久兵衛がねつた。からいさの纏ぬひにたてもんのうちかけ白トゆすのへりさりむく。かみは手からわけ。かみのうへは小間物の見せの如く。禿のかみ一人は。はりうち。一人はやつこしまだ。うつくしくかみゆひの長二がてぎはをみせ。ふり袖まんとす。川波せはしんそう玉夕。つきそひきたるばんしん玉夕おいらんのみもんな。おす川「おふじさんどふなんしたへトいつた女房」さあおいらんお上りなされましおす川「こゝがよふすよ玉夕」えんさんよくお出なんしたね喜の「いつもうるばしいおかほつきね。まあん」何かむさやうにきれへでござりやす玉夕「なぶつておくんなんすなちがみんすにへ引トいふうち松田屋わかい者清二。てうちんをけし。おたのみ申ますと出て行。たす。又つけてえん次郎みなくへやるおす川。おす川「いの字いせ屋にときやうさんがいさつしやるからおれがいふとつて。よくお出なんしたといつてきや。禿はむかふへ行。あげえんの川波「チャアわつちといへばびつくりしいしたよ女房」此お盃はわたくしがあづかり申ましやう。お雪やすぐにつれ申しやえん「五町と萬里と。おしづ八百吉をよびにやつてくだせへ女房」かしこまりました。下女てうち先へ出る。けいせい女房「さやうならおいらん玉夕」おやかましうござりいした女房「どなたも御きげんよう。みなく一町目へまがりさきへ行喜。喜の「井川さん夏里さん。何なすつた。何かえんになつてかきなさるね。なつ川」でへぶ道がちかふおすね喜の「こんやはえんさんのつきやいさ。ト云所へち廻り二三人地廻り」ナンだあかいべゝに青いべゝに白ひべゝをきてこゝの見せはなんの事はねへ。げくわの

薬箱といふもんだ。トあくげんを。夏里「エ、すかねへぞよウ引喜の」後程お目に懸りやせう。ト松田屋へいる。みなくのうれんのそばを行。うちばごんくごにぎやかにてさもべやのまへにおいらんたちのてうちんならべてありながるはべにおいをかけてならへ。廻しかたはたき火にあたり大がまのうへの十二のさうみやうはけんびし。山十五さびやうの山をてら茶や女「源兵衛どん」花の札のはつてある下の。帳ばに。番頭伊平治いで。伊平「源兵衛」。お客人だぞよ。みなくはしを上げる。跡トりにて女郎四五人のこへ。源兵衛「すぐにござしきへいれ申そう。ト先へ立てゆく。だれで。えんさんよくおいでなんしたさくちくぐにいふ。源兵衛「すぐにござしきへいれ申そう。ト先へ立てゆく。だれにうちなづら。禿「たのもどウ引そつちでさつきからよばつしやるぞよひさ。禿「こんたあどけへ行禿「長崎屋へ行は。禿「さがりい引す。おす川「いつの間にかごへかなくなり。ばんしん玉夕。ふりしん川波。つきそひ梅ばちを書た。天水。梅げのうへまをく。

○そもおす川が坐敷のこのみ。中の間の飾夜具は錦の山の如く。一面の琴は遙に見る瀧に似たり。かこい。せうがま。おせち。圍の常笠は松風の音かど驚き。ゆこうの小袖は楓の紅葉きたるが如し。本間の天井には四季の艸いろく。をのく花の手柄をみせ。はりつけには朱簾を畫て雲上にちかしちん金彫の机に。義之の墨帖をちらし。湖月萬葉のそうしを並異香四方にくんじて大盡の紙花こゝにつき。龍のくびなる玉。つばくらめの子やす貝も。こゝに持來るべしと思ふばかり座敷の真中に銀走よくをてらし。朱詩繪のたばこぼん。さんぼうの盃臺。かけばんなをしてある。

まあん「家名は松をもつてし。紋所は柏をもつてし。床柱は栗をもつてす喜の「サアむづかしい事を



いゝでした。此からかみはだが書た玉夕（辨州さんがおかきなんしたよゑん）もふとまりは志れたから。大のみにするがいゝ（此うち廻しの蓋てうし持来りらうそくのしんを切て行所お定りの通。なかい吸物持来る。茶やの女でうちんをけし。はきものご一所にらうかへなく喜の助にあがるふりそで夏瀆）政さんよしなんしいつツツて階子へ札をばらせんすにへし引（トいきをきつてかけ来る）「休日の湯屋を見るやうにでへぶはしやぐの喜の」そんなにさわいだら又。やりてがみせ三味線の「といふ聲で。りくつをいふが夏瀆」それでもからかいんさアナゑんさんよくお出なんしたね。お雪どんどふした（ト茶やの女のかたへさりつく跡より来る）「此子達二人りはむまやうにうつくしくなつたよ玉夕」あいさいつそいろけづきんしたよ。禮日もふり袖の跡おさへは。ぬしたちふたりさゑん「早くつき出しになつた所をみたい。其時は志らぬかほだらうの。夏いろさんの初日はをふかたおしやうがするだらうまゑん」アイサその時になるときものゝあんじがござりやす。上衣はまぐろの瀧（たき）ぼり。むくはぼたもちのちらし夏いろ「よしとおくんなんしばかりしい玉夕」お雪どん一ツのまつせへナ夏瀆「どれおれがついでやらうよ茶女」イ、エ茲へおくんなさりまし夏いろ「一ツのまつせへ喜の」あいらんはどけへ行（い）しつた今迄いさしつたやうだか。もふどけへかみをなくなつた。ほどしぎすのようだゑん「松田屋のけいせいもだろうそくを見るやうに折ふしたちぎへかするてあやまるよ玉夕」わつちらんは今一生のきやく人の所へ。あいさつに。下々しきへお出なんしたよ琴のやよび申てきや。川波さんたばこを。出しておくんなんし川波「此引だしかへおつせん

よ玉夕「エ、ぞれつてへ。そこにあるからおみなんしまゑん」きゝようかるかやをみなへしと聞（き）るはへでへぶ地口が御上達（ごじやうたつ）だ玉夕「それでもぞれつたふおすアナト云所へ。するがやの男。おくり物もち来る。朱のちんきんの丸ぼん。あらゐ朱の（かくひらはたまごほり。さんぞてのどんぶりにハ。はつけにきしやうゆをかけた茶や男）ゑんさんに七右衛門申ますやつ。これでちやづれさいはねばかりけいせいへのてんさり。ちや屋がつうなり

こんはんはよふお出なされました。只今玉やのお客人を納ましてそれへ参ります。まつびら御めんなすつてくださりましと。申付ました。そして玉やで小紫さんがあなたへよろしくと。を（つ）しやりました（トもちくしてかへる所へ表さしきのをいらんかみはまのふ）さめ山「ゑんさんよくお出なんしたねゑん」イヤアとめ山さんとふなさりやした。はなしかあるからちよつとこへお出なせへ（さめ山）「マアちよつといつて後に参りいしやうく入ちつておす川みすのはながみてむねをあふきながらきたるおす川」もふなんだかわからぬ事のきゝてになつて参りした喜（お）「あいらんこれはどふでござりやす玉夕」これへばまいらしたかへおす川「きいしたく玉夕」じやあおつせんかへおす川「あいさまゑん」ちめへがたはしやあねへかの蚊（か）はねへかのど。大音寺（たいおん）めへのとふしやああるめへし（みな）わらおす川「もしへ下々でめりやすの本をもらつて参りした。長崎屋でぶんきようさんがおひろめなんしたのでおすいつそあだでようすよ玉夕」チャおみせなんし。すがほどやらいふめりやすかへ。早く（お）覺へどふすねへおす川「まあのちにおみなんし（此うちせん出る。きうるしのわん。せいひつむしくいのくわいせきせんにて二つき松田屋ゆへしよく）物ばびなり。こん立はこにりやくすちよくばかりは松田屋のつけ目にて。れんこんのらん切。はしは箱根からさりよせる萩の先をけすつたの。これも今のりうぎ。みなへはらほよきゆへ。茶びんささもにならべたばかり。せんはざしきの捨



小舟なる。こゝへ女けいしや。八百吉おしづ。たいこもち五町萬里。するがやていしゆ。七右衛門來り。大きはぎになる。此所のしやれ。あまりそうくしくて。きここれぬゆへこりにりやくすふこふするうちひけをうつゆへ。ふん次郎がこををさめ。喜之助。まあんも。それくのさしきへ行けいしやたいこ持みなくかへる。おす川が次の間をたてきりてうあしのぜんをさりまき。しんぞうも。けひぞうをばじめるすりぶたの上にくわへの丸には。ほうかのぬしやのあたまたの如く。まいたけのうまには手習双紙を引さいたるに似たり。ようちうてのふ川波。まあんさんばどふなんした夏いろ。いつそもふよいきつてねてままいししたいつそすかねへちかめぼうづて。おすよ。すかねへぞよウ引川波。あやばからしい。何もたべるものが。おつせんよウ引夏いろ。どなかへ梅づけをとりにやればようしたねへ。これくその子はだれだ。此土びんへ茶を一ツもつてきてくりや。い子だぞよ。ウ引トいなながら。はしのかはりにした。松ばのかんざしを。あんごうへ。つままして。ふいてさすおす川がぶるは火を入て來りそ玉夕もふいつてねや。また長火鉢へあたつてべんくど起て居めへよ。長火ばちさいたるひばちもつ。禿ここの「さやうならお休なんし」くろもとのやう島浦「玉夕さんくちよつと顔をお出しなんし玉夕」何ンでおすへ島浦「あのねく」。これくがさつき見せへ参りしてね。あさつてこやうと申しいたよ。ぬしにもよく言てくれと申て。あまやべりをだしきつて参りしたぬしにもとんだうらみがある言のはのど言て参りしたよろこんであくなんし玉夕「わつちといへばかたつきし主のきなんすのを待切てをりいさアなア。此の中の文を届てくんなんしたとおつせへしたかへ丈さんもあんまりすかねへふにんじやうだよ島浦「はらをおたちなんすな。ぬしがつれ申てきいすどさあさつてはままつていろとつて。参りした玉夕「ぬしといへばうれしがりきつて

いるの島浦「それでもうれしうあさな玉夕」それはそふと川渡さん。さつき山崎の人に。ひな形をたつてあくなんしたか川波「もつてまいりしたよ玉夕」けふは廿六日だね。うれしうおす。あしにはかみあらひ日でおすよ。ト云所へしんぞういつてふ。ま。いつてふ「玉夕さんへごしやうでおすから。なんぞくすりをあくなんし。いつそもふしやくがいたくつてなりんせん。トかほをしか。島浦「わつちらんの所にきわう丸がおすからまあざしきへお出なんし玉夕「ぬしのきやく人は。おかへんなんしたじやあねへかへいつてふ松さんはかへりしたが太兵衛どんがをくりにしてやるふから。でろとつて。夏花さんと民の戸さんと。いちごておすよ玉夕「ム、はつかいつてふ「あいさ。ざどうの坊主で。さけをよくのみひすよ。さつしてあくなんし。わつちといへばなぜこねへに。びやう身ンになりいしたらうねへ島浦「えいじんさんに。見てももらいなんしたかへいつてふ「やつぱりまやくだとおつせへしたよ。それでもあんまり引込と腰元にするとおつせへすから。けふもむりに。みせへでへした玉夕「しま浦さんこの次の間へ志のびをおどめなんせんか島浦「よし志よう。トはなすうち時はうつり。八ツもすきて倉まほりのひやうし木かつちく。さ打つて廻れば。皆くいつくへしてうしろをむき江戸丁二丁目相生屋御せんめんるい所を書た。そばのせいりう。れんトにさみしく。二てふつとみごばん八形のさばぎもいつしかまづまり。おくざしきにてこのね。さへわたる。きくトこうは。なつんどかつま音ト。今迄まやれたるざしきもたまりの天神。いびきのおさはいるのなきごまにまぎれ。火の用心のかなぼう。あんまのこゑもまづまり。くさも木もけいせいもれて。げけものまほまざすとれこばかりおきていろ。夜はしんく。さふけわたる折よしとんぞうが。あいづにけいせいしる姿。きたり喜之助がびやうふの内へはいる此所の妙意作者まばらくあづかりなり。此本をみる人。たいてい御すいさつあれかし。むかふざしきは死ね死なふさいふ中さみへ廻しびやうぶのたいこうぼうもよだれを流すばかりの



むつ言。ほつち 女郎「それおみなんしふどの外へおちなんすな。マアこつちらをお向なんし〜  
 くのはなしと云 客「あやまつたら。ふ志ようながら向てやろう。むかせられるは恩ならず向てやるのを恩にし  
 てだ女郎「男心のにくいのも 婿「ほどのやぼとなりいしたのさ。サア 誤すから。お向なんし。さ  
 み志うおさアナ。ぬしにきし申しす事があすに〜。ゆふべどけへお出なんした。京町かへ  
 客「フウあつな事をいふの。京町のねこがあげや町へ通つたうわさは聞たが。おれが京町へい  
 つたさはまだきかなんだ女郎「よしておくんなんし。とめ川さんが中の町で見かけた。あつ  
 せへした。サア本どうにおつせ〜し〜おい〜なんせんと。くすぐりいすに〜 客「これさよさ  
 ね〜か。ぶちのめすぞよ女郎「そりやあうそでおすが。ほんに主ア。わつちをよんでおくんなん  
 すきかへ 客「此頃はで〜ぶ。ぐちになつたぜ女郎「それでも若。ぬしのどつさんやか〜さんか。  
 ふ志ようちな時は。どふしんしやうねへ。それを思ふと。死たふおすよ 客「それよりまだ先が  
 九二年三月といふ物だから。其中にはそつちに。とんだ事ができるだらう女郎「よくつもつてお  
 みなんし。五年このかたはつちがみのためにもわるし。ぬしのためにもわるい。たび〜あ  
 きらめて見ても。思ひ切れんせんものを。ほんにあく縁でおつしやうよ。ぬしもそふ思つておく  
 んなんし。あれさまたねなんす。はな〜小よりを入れんすに〜 客「これさあやまつたよ。こんや  
 はむしやうにぬむい。たばこを吸付てくうや。てめへおれが事ばかりそんなにいふがおれが顔

のた〜ねへやうな事をするなよ。こんなろい句を出すやうになつちやあ。たまらね〜女郎「ま  
 だ其やうにおうたがひなんすなら。此う〜ゆびの二本や三本は。いとい〜せん 客「てめへに  
 指を切てもらつたどて黒焼にして。むしぐすりにはなるめ〜し。しほをつけてやいてもくはれ  
 ね〜女郎「そんならどふすればよふすぢれつたふすに〜 客「何かあむにゑきもね〜事をい〜出し  
 た。少しはらきたは〜。さつきそこにあつたのはなんだ女郎「仕切場でおすよ 客「仕切場は驚客「そ  
 いつはあやまる。れいの小梅のかり〜するので。ちやづりにしやう女郎「これ〜太兵衛どん  
 く〜。これさごしやうになるからの茶づけせんを一せんこさへてきて。くだせ〜〜〜〜に引  
 きは大が女郎「あれさおよしなんし志やくがいとふすよ。さわつてもおくんなんすな。けがれんすぬ  
 しやく 客「あわりいしやれだよ 客「そんならどふしても。あの客をきれる事は。ならね〜か 女郎「そ  
 れがきにいられ〜で。主がお出なんせんでも。きれる事はなりいせん。わつちやしやうじきぬ  
 しのすいりようのとふり。あの客人にほれていんすはな 客「で〜ぶてめへは白ヲばけに。ごふ  
 てきをいふな。それじやあもふりやうけんがならね〜は〜女郎「りやうけんとは。兩方の手にけ  
 んをもたせる事かへ。あぶなふおす。およしなんし 客「何〜だこいつア。い〜かと思やあがつ  
 ておれがこふいふ句を出ス日になつちやあ。かくごうしろ。まづで〜一チこの枕の紋所も氣にく  
 わね〜。此きもの〜裾もようのあたりもはくぢよう仕てまま〜女郎「これさそね〜に足げにしな







ん」そふさく／＼ 茶男「さやうならど くゞりよりうちへはいり三人のこの物を出してわたす。むかふのやひうらる。竹村のまへには名札をはがした。跡のあるせいろうつんである。かしのきやく八ッを打く上りてやい。ふしみ 鬼勝「コ町のつた方二人づれにてかへる一人はきりやのふこての小便所。むかふのはめへ小べんで。のく字をかきなから 鬼勝「コウ鐵へまてへ。いつ所にゑくべへ。ゆふべわが女かきてないふにやアナ。きいてくんなさへ。  
 鐵さんといふものはわからぬへものでござへやす。こんぢうさよじさんに一本ノかりてたて引キをしてあげてやつたに。今夜もまらんかほをしていやすあんまりおしがつゑ。八ッを打てあがるきやくはみんなあのくらないなもんだ。なんのかのといやアがつたからな。それがナイ、かげんに戸尻を合せておいたぜ。あいつアどうもろこしを。よこぐわへた志やうといふ。つらだ ナアふし町がしは八ッにみせを引ゆへ八ッを打てあ 鐵「ほんにそふいつたかどんだきまぐれじやあねへか。こんぢうは二朱銀をほうり出して酒肴付てあすんできたア。あいつがいふなア五年ほど跡のこつたあ。こん中もナ。きらずにあみをいれていつたやつで。ほぞを七八へつけやあがつた。あすこのやてへぼねは。をくかたあいつがくらくらいつぶしてしまうだろう。あのすうてへをみやなまとい持にすればいせ。エ、くさびをそぎたくなつた ト云はせつあん 鬼勝「なんでもばへ行こぞ  
 んにやあ虎やへあがるべし／＼こいつアおもひつきだつけな エ、引ト行過る大門の口番人の火をたて。こふまきのにこまりさいふしんぞう。ふもげたやうなふる。新造「おつなてうし いてあたつてゐるすりによりかいつきやくをつけている。これましりみせ以下の。女郎さみへるなり。 新造「のこゑにて。チャ喜のさんどふなんしたへ喜の「お久しいの何今時分までうかく／＼している客があるものか。い、かげんにしてけへりね

へ。とんだねむをうめだ。みつのへさんによくいつてくんねへ新造「おさらばへ ん次郎三郎は江戸上しをうなりなが 茶男「かづさやア、おと「アイこゝでござりやす ト白玉のたな下のあた ん」なせこつから。大門を出る 茶男「かづさやア、おと「アイこゝでござりやす ト白玉のたな下のあた ん」なせこつから。大門のきはへかごがなりません むかふより泉やの娘下女をつれ。朝参よりかへる ん」お夕さんでへぶお早いお出のゆふ「チャゑんさんどふ被成ましたけさは山谷のしやうぼうじのびしやもん泡へ参りました ん」こゑんさんによくいつてくんなさへ ゆふ「さやうならおしづかに かと「サアめしまし 茶男「おはき物はついたかさやうなら此間に ん」よくいつてくりやかと「こつちらのだんなお羽をりをもちつどおいれ被成ました こ「ぼうぐみよしかどつことな トかこ三てふさ もにあがる  
 ○をくられて行てうちんどわかれ路にきくかねとばかたけてみればつりあはぬ大じんきやくにこいとらうおくるけいせい道心者ものもらひ さうしんせや  
 同士朝咄し。口よりけむの出る頃。立や今戸のかはらけむ。すはる四ツ手に三人は。にほん堤を一ツさんに。いそがせてこそ三重引「行空の







序

誰ぞや此夜中に扇たる門を擲くば。行暮たる修行者か。たゞしけんどん蕎麥の門違か。同氣もとむる鷄唐の兩子一卷を懐にして來り。予に校合をせよといふ。三人寄て文珠にあらぬ。ふたり一坐へきりかけし。紋目を逃る智惠ふくろ。はたぐといふは本屋の禁句。きんく萬部の書をつむとも。女郎をころす秘密の傳は此一冊にとゞめたり。客と女郎の腹によくはいりし如き茶話なれば。夜半の茶漬と題號して。世に行ふといふとを。廻し行燈へ樂書すこと志かり

天明八戊申春

山東京傳述

○かけ合の序

●けいこう  
▲唐州

●けいせいにて。かわゆがられて。うんのつきいはんや。まどあるに。をいてをや。志かりといへども。まことがなくは。おもしらくも。なんともなし。あるもかなり。なきもかなり。あると思へばあり。なきとおもへばなし。こゝにおいて。あそびの。たることを志れど。此一冊のはじめに志るす



# 夜半の茶漬

山東京傳著

## ○發端

番所才兵衛がどもし火は。堤八丁の漂冷ともいゝなん。五十間の砂利に青海波のさまを見せ。衣もん坂より大門へ入來る人を小舟と見立しは。こがれよるとの心にやと面白し。四郎兵衛がかためし關のとぢも。そら行雁のたよりかど見れば心うかるゝ物から。家くゝの鬼籠の青き見わたせば。風に志らふる松原か。爪音のかすかに聞ゆるも。胸ときめくわざなり。行かう契婦が提灯は。用水の桶にくらべ。駒下駄のからりくゝはならくの底までもひき。釜のふたする赤鬼が心をもとらかすべし。けだしつきの七重八重にはうきおもひをつゝむぞかし。黒仕立は晦日に月のでぬすがた。女郎のまことをわがものにしたるにやとおかし。きのじやに四季のばなをさかせ。見世に夜の錦をかざる。下りいすといふ禿の聲。はや座敷くゝもあさまるよとおもへば。いつのまに大門はどぞしぬ。引四ツの拍子木せはしく。一度に見せを立鳥のひしはまぐりにやよびつれあつまるらん。さはげしけれど淋敷ものにおもひなさるゝ。更渡夜やあんま

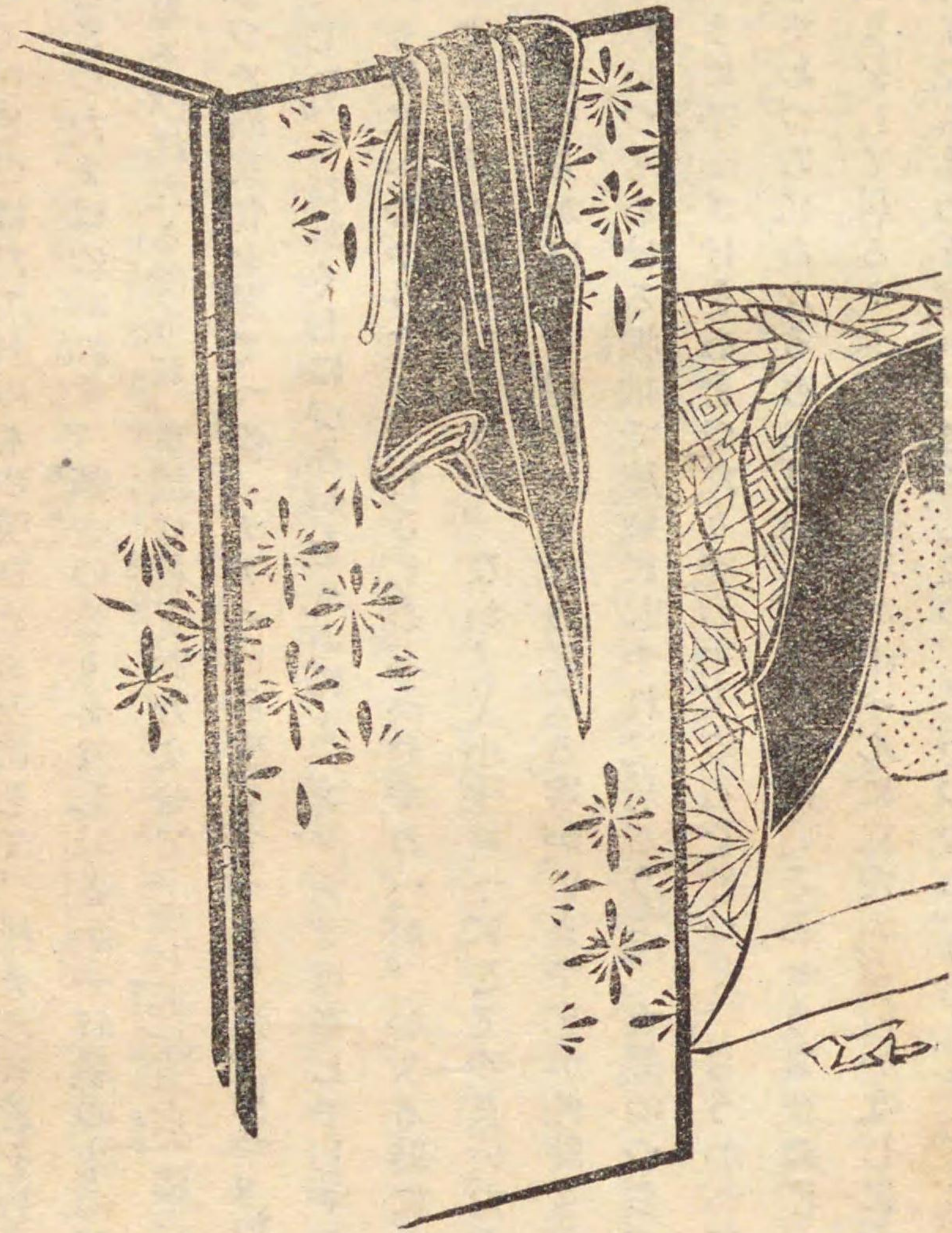
針。ねむそふな三下り。わけは聞へぬむつごとに明て行よやむらがらす。かわいくの一盛名代の客たいくつのあまりかみ入の間より新ソリヤアなんぞんすへうらなひの本なら。わつちにまち人を小冊を出し見て居る所へ名代のまん來り見ておくんなんしおがみんす。客そんなもんじやアねへ。けふ觀音の地内で見あたつたからかつてきた新わつちにちよつとおみせなんしナ客まちやこれは手めへたちのいろをするあなを書たものだ新いやだねユつれへヨなんだかよんでお見せなんしへ客そんならあんどんをかきたてやんごうのかみへ。つツさしてふき。新サア早くおよみなんしな其文曰

## ○美濃近江の寝物語

それ屁はころしてひるにまかざ金はいかしてつかふにしかず。いきた金とてものいつたためしなく。死だ金とて幽靈にもならねど。たゝころすといかすとは。かの屁玉と金玉程のたがひはあるなり。ころすいかすとはなんぞ。出駕の帳の紙かづをふやし。帳場のぬり札のばせきをふさげ。角ト屋敷を棒に振て伯父にもつたる兩替屋が下モやしきにをしこめられずんば其いきしにはしるべからず。耆婆扁鵲といふども。金銀の脈ばかりはまればたきものなるぞかし。金をいかしてつかふといへは儉約する事とのみ心得たるもあれど。此廓に入つてけんやくといふことなし客齋の人ばかならず。此里へ入べからず。さりとして傾城は金でかふものにあらず。意氣地



京傳醉画





にかゆるものところへべし。あそびつくして悟るも可なり。酔ふてくるうて遊ぶもよしと庭のたき火の元且より蛤うり来る大三十日までよしはらをうちとさためたる二人の遊客あり。一人は美濃一人は近江とてひとつほたて貝のもの喰ひあふ友にして。桃えんに義をむすび多の口上書にも。たがひのことつたえはのかれす。斷金の交りをなしけるか一日秋の夜の長きに宵のにばなのさまただけで。ねそびれたる餘りに。美濃は枕をかたよせて。コレ近江子公は一町めに。いろができたそふだのちつと新文句を聞てへの。ナアニいろ事もてへそうだ。いさゝかなことさ。いさゝかな事もすさまじい。くひかくしはつみがをいによ。ソナラはなしやしやうが。はなすもうぬぼれ。咄さぬもはにかむやうなり。むさしあぶみじやねへが。かゝる時にや人は死ぬらんだ。名はいはずとせうちでござへしやうが。なか／＼小手めへにこてのきいた女郎さ。せんでへあの女郎の所へ。わつちかはむく屋敷からためになる客がいきやすか此間も其客と一所にいつた所が。わつちはいつもあける振袖で座敷にしやれて居るうち。女郎のつらつきがどふもあして。何かむしやうに茶碗だけをあをつたり禿か手玉の石をとつて。らうかへなげ出したりして。何か心のうちでわつちにあたるあんばいさ。其客人はいさみせうちせぬといふものだから。わからぬかほつきをして居るそふするうち客か小べんに立たから何かなしに女郎をつかまへて。でへぶあかしなたちまわりだか。どふしたのだといつたら。うつちやつてをきなんし。

わつちか勝手でするまうちさど。つんどして居る。わつちもぐつとしやくにさわつたから。ふみのめそふと思ふうち。客がかへつてきたから。そまらぬかほでよそ事のやうに其客にむかつてのはなしに。モシ今おいらんのところにもはなしやしたか。わつちやこんやはどんだかんしやくな事のあつた晩さ。此ころいさゝかな戀路かできやしたか。さつきそいつに中の町であつたところが。だれにかしやくられたそうで。くずと見せるしやうふの餅を見るやうにむしやうにふり／＼するからふみのめそうと思ふうちえんりよな人がきやしたから。それなりにしてことへきやしたなんどわからぬへ女郎だねへといつたら。客はすこたんどいふものだからほんの事だと思つてフウありかてへふみのめしてやればよかつた。くやしいことをしたと。うぬがあひかたのうわさをすることも知らぬへで。あげぎせるで居る。女郎もそらつたばけたかほでいふにやア。それたかたしかに其女郎しゆる。おめへはんのしやうわるをまなんすのを。聞だしたからの事でおだんしやう。それは女郎衆が尤さど。又よそごと云うちが妙さ。そふこふするうち床をおさめて。客はおもて座敷のちかづきの客の所へあそびに行。茶屋はもとよりうす／＼まつて居ることなり。座しきの新造はとりもちのこと故みな／＼はづして行跡で女郎をつかまへて。床のうちへひきずりこんで。物もいはずに髪をむしつて。くしかふがへをおつぺしよりの。ひぎの所へひきよせて。枕で三ツ四ツよこつつらをくらわせて出てくる。女郎はお



きわがつてすそをひきどめる。拍子ひょうしにおくりもの。角かどびらをひつくりかへして。そこらは紙かみくずのたまごばりをこしらへた様に。らんちきのさいちうへかの客の聲こゑがするから。わつちはれんじぶたへにをく座敷へにげてままつた跡へ。客が来て見た所が其様子故。あきれてものもいはずに居る。こゝを女郎がでへぶでかしたよ。てへげへの女郎だと化ばけのかわをあらはす所だが。ぐつと平氣で。その客の胸むねぐらをとつてひきよせ。モシおめへはんはうら見な人であだんす。なぜわつちを此様にしなんしたと云。なを客はあきれておめへ氣が違ちがやアしねへか。此さまアマアなんのこどだとばやかんしゃくのめつき尻しつともおもはず。氣もちがふはづさ。何をかくしんしやう。宵よから名代の客があだんしたが。あつちへはゆく氣も無ひから。おめへさんにごどわりもしやしなんだ。其客がこのごろぢうおめへさんのことをせいていやしたが。今夜もおめへさんのきなんした事を聞て。もらへどなんだいをいひかけたを。新造衆にいゝかげんにくるめさせて。おきいしたが。今おめへさんがおもて坐敷へいきなんした。あどへつけこんで。わたくしをこんなにぶちんした。これもみんなおめへさん故であだんす。これからはあの客づらへたてひきだから。おめへさんをよびとげねばなりひせん。おめへさんもそふ思つて居ておくんなんしと。ひざへもたれのなき聲をだしかけたから。客は其一ツ句ひとことでぐつとこころされて。そふいふわけならをれもたてひきだから。りつぱにしてきてやらうといふさいちうへわつちは

ぬまきのまへをび。新造の床とこから來たかほで。でへぶさうくしかつたがなんだへど。屏風びやうぶのうちへかほをだしたれば。その客がいふには。近江きんけいか聞ねへ。こうく云わけだはな。そんな客があるものだ。それはとんだ事ね。おいらんどこもいたみはしやせぬかど。志しらをきるうちがふてへしうちさ。うぬがをもしれぶつてをいて。いたみはしねへかもすさまじいねど。のり地ちではなせば。美濃みのがなるほどこいつはおもしろ狸ねこだはへ。わつちが二丁目のせけへもあじあじに成りやした。それにまわし方かたがかけびにか出たから。そのまきぞえで。二十か三十のはした金を。ない所からやかましくいつて。二かいがふさがつて居るから。わつちもとんだうつてゐるのさ。きのふきやうに用があるから。中の町までこいとよびによこしたから。七ツまへから下モのてれん茶やへいつた所が。もふ來て居る様子故。二かいへあがつて見た所が。手あぶりの火をあつちへやつたり。こつちへやつたりしてゐたが。こゝへ來なんしとまねくから。コレたいそうらしい。きゆう用だアなんの事だといつた所が。いゝへぞつは用もねへが。あんまりあいてへからよびにあげんしたのさといふから。べらぼうめほんに用があるかと思つて。まじめなようを流して來た。いゝきせんじやアねへかといふうち。小ゆびのかみでまいてあるを。ふつと見付たから。コウてめへゆびをどうした。コレハ夕べほたて貝をおろすどつて。やけどをまいた。ふゝそりやあぶねへ事だ。薬でもつけたかと。わざとこしらぬあいたつを志たればモシへぞつ



けふよびにあけたは。此ゆびのわけさ何をかくしんしやうわつちやゆびをきりん志たど。平氣で云から。わつちもぐつとしやくにはさわつたが。様子の有りさうな。事だと思つて。わつちもおなじく平氣で。ムウそれに付て用とは何のことだ。さればさ。マアもつとそばへおよなんし。おめへも見なんすどをり。わつちも夜具をまねへけりやアなりんせんが。新造をだして間もねへ事で。みんな客人にも手をおわたから。つえにも柱にもと思ふは。まだ中橋の客人ばかりでおぞんすが。つねへおめへとこふ云わけをしつていやすから。こんどゆびを切つたら夜具をしてやらうト。なんだいをいひかけて。ざりづめできれいににげるあいさつだから。ふびんと思つておくなんし。夜具のかばりにゆびをきりんしたと。なき聲でいふから。わつちがいふにやア。コレわりやけがらしいこんじやうじやアねへか。何屋の誰とたいそな名を。付て居る女郎の様にねへ。わづか五十か六十の夜具のかばりにゆびを切るとは。あんまりはかぬへこんじやうだ。ゆびを切るくらゐなら。なぜおれがどこへいつてよこさねへ。たどへかけが残て居る程のまぎなれば。高利の金をかりてなりとも。そうはさせねへあんまりわりやアをれを見くびつたな。コレへなんぼしやつたらがうつくしくつても。女郎のくびにほれる美濃じやアねへ。心いきにこれほどでも。おもしろい所がありア。命でもやるわへど。例のわつちが流儀で。くちぎたなく情のある文句をだしかけた所が。女郎のいふには。ホンニそふいひなん

せばわつちがばやまつたはわるかつたが。それもおめへの身のうへをさつしてかばう心からさ。かならずにくいと思つておくなんすな。そんなら此事をいつてやつたら。つがふもしてくんなんす氣でおぞんしたかへど。云から。志れた事だどふでもする氣だわいといつたら。又ソリヤほんの事かへどくどく聞から。べらぼうめ志れた事だわへといへば。聞きねへホンニうらしい心いきでおぞんす。そんならモウあさぎの頭巾をぬいでおめにかけんしやうと。小指の紙をすつぽとぬいで見せた所が。ゆびはなんの事もなく。サア今いひなんした通り。ほんに實があらば高利とやらの金をかりてなりとも。こんどの夜具をしておくなんし。それができねば今云通り。あの客人にゆびを切つて夜具をしてもらねばなりいせん。かたわものにするも志ねへもおまへの心志だいでおぞんす。いはれた時は。わつちもぐつとへこんで。ア、あんまりつよみをいわねばよかつたと思つたが。こいつはこゝでへこんでは心を見られると思つたから。ム、それでてめへの狂言がきこえたわへ。此ごろおれに秋風だから。けへりがけのだちんに。りづめで夜具をさせて。突ださうと云あく心か。それと志つてもいひかけられたしやうがにやア。たてひきだこんやぢうに夜具をこしらえてやらう。志かしそれにきれ多をそへてやるからそうおもへ。それが出来たらモウおれに用はあるめへ。早くけへりやアがれ。そばに居るもけがらしい。とふみのめした所が。おめへもくちのやうにもねへきれる人に夜具を



してもらうやうな女郎でもおざんせん。そんならあつちの客人に指を切てやるまでも無く。おめへときれいば得心だから。見事こしらへてくれんす。夜ぎはひらうどにしやうか。にしきにしやうか。ゆるりとあそんでおいでなんしと立てゆくから。勝手にどこへでもうしやアがれと言ながら。うちかけのすそのうへ、あぐらをかいたものだから。ゆきたくてもゆかれぬへはさ。それからわつちか紙入の中から。例のきしやうを出して。すでに火ばちへぶちこんで。くさぶえの下坐て物がたりにならうといふところへ。茶屋の女房がとんで来て。ひつたくつてまきおさめ。かならずはやまつた事をなさりやすな。これはみんなおいらんが。おまへの心をひいて見る狂言の大帳さ。夜具はすつぱり中橋の客人の方から出来てきて。今晚敷ぞめでござりますと跡は笑になつてままつたが。モシなか／＼新ノ手をだすもんだねとはなせば。なる程あの傾も極の字が黒くなりやしたと。いづくも女郎買のはなしほどのりくるものは無く。二人は目を皿の様にして。はなしやむべくもなく。近江がモシ美濃さん其指で思ひだした。わつちがゆびの中買をした咄をまたんだがわつちが。まつて居る江戸がみに文車といふものがあるが。神田へんの客に犬悦といふものが有つて。さる座敷もちにこの春からなじんでゆくが。いつでも此文車をつれてゆき／＼した所が。いつしか文車に此文車がほれていろ事になつたのさ。犬悦は其事をゆめにもおらぬへで居るが。此ぢう此客が口舌のうへでゆびを切ンといツつた所が。すのこ

んにやくのどのがれたがるあいさつだから。ぐつとあつくなつて。おれもいひかけたからは。きらずばモウゆくまいといひだしたが。此客がゆかぬへけりや文車もいろがでさぬへから。女郎に云には。コウ手めへこんどゆびをきらぬへけりや犬悦さんがきれるといはつしやるから。こゝはおれがためをおもつて切てくれると。頼た所が。女郎は文車にほれて居るといふものだから。なるほど犬悦さんに切る氣はないが。おめへに切るきできりんしやうとどく心して。きるといふにきわまつた所が。文車がわつちが所へ来て相談するにやア。モシ近江さん。こんどこう／＼云事がござりやすが女郎もまづが有つてきらうといひやすが。こゝをおめ／＼ときらせてはわつちが。あんまりちゑがござへせんから。こゝがおめへのちゑをかりるばだが。指をきらせず。丸くおさめる工夫はあるめへかといふから。なる程そこにいゝ案じがあるめへものでおめへが。其客もそふいふ云が／＼になつては。きらずはせうちおめへが。こゝに一ッおもしろい案じがある。どうぞ其女郎に金を五兩ださせぬへ。それが狂言のすぢになる。これはおれがまつた廓のうちの者だが。さる新造と色事をして居る所が。其新が大ぼれにほれて。指をきらうといつたを。きらせてはくひつきになると思つて。そうするにもおよばぬへど。にげ口上をいつて置た事をちらときいたが。こいつにのみこませて其新造にゆびをきらせて。身がはりにたてるまゆこうはどうだ。此地いろめがひんこうといふものだからゆびが五兩になれ



ば。此物まへうかみあがるから。どんな事でもする氣だ。其新造もほれてきるゆびだから。ほれた男のうかみあがる事なら。それと志らずにきつてもしんぞつのとよくといふものだ。さすればつみにもならぬへ。そこで其ゆびを犬悦大じんにあてがへば。公がはたらきも情も見えるといふものだが。こいつはどふだといつたら。それは妙按でござりやす。ほんなら五兩と其指とひきかへにしゃしやうと。うれしがつてかへつた。それからわつちが其地色にのみこませ。どうく新造にゆびをきらせて。代金五兩をとつてやつて。犬悦が方へはいつくかにいよく切るからこいと。女郎のほうからよびにやらせて。來た所がゆびきり道具をとりあつめて。あさへてはざしきの新ぞう。きりては文車。犬悦が見る處でゆびのかわをすこしかけて切た所が血がすこしでる。かねて例の身がはりのゆびを床柱へくつつけてをいて。チャゆびがどこへかとんだとそこをさがし。とこばしらに付ているゆびを見付だしたかほで。うまく一ツはい身がはりをくわたのさ。犬悦もめのまへでされた狂言だから。すつぱりかゝれて。そのうへならず其指をさけにひたしてのんでままつたのさ。此坐敷もちも叱しんぞうもひとつ内の女郎だが。二かいでさへ。此狂言を志らぬへで。此ごろわつちらがうちでふたりゆびをきつた。女郎しゆがござんすと。わつちがまへでうはさするを志らう志らをきつてままつたが。指をきつた新ぞうが。虫がまつたぞうで。かの地いろにいふにやア。わつちがゆびヲどふ志なんした

もつて来てみせなんしといひだして。わつちはこまりやしたとはなしたが。それからどふしたかあどはきかねへ。なんと女郎けへもこわへせけへになりやしたと。五分もすかね手がらばなしの。あどだれてくさぞうしなら。ゆめさめやうと云ばを。ふたりはようくねつきければ。いびきの音とからすの聲の下坐にて。あかつきのまくはあきぬ

○ある夜此二人のものがたりを。壁ひとえこなたにてよもすがら聞ぬ。まことにはくじやうの世の中。これを思へば女郎のうそも客のいつはりよりいづるところ。きやくほどうそはつかぬけいせい的一句よく此じやうにかなひ。ぐわんそ花紫が歌に

たのめてもよそに心をかけはしのわたりくらふる人ぞうらめし

と詠じけるもむべなりと。こゝに書捨て。川竹の流れのたき津瀬に。その耳をそゝぎぬ

## 夜半の茶づけ大尾



後序

此みちの不通に此道を釋は。繪にかけける女郎の胸  
 づくしとつて。うらみいふにひとしく。此みちの不  
 通此書を見るときも。紅毛人の口舌を聞が如くある  
 べし。通と不通の本阿彌は。此兩子にあらずして誰  
 ぞや。野暮の見るもんじやアねへ。とをひくせく

玉むち來賀無禮亭において跋す

自叙

千兩の黄金も。三十二文の孔方も。悉皆一物にして。上は三浦の高尾。  
 頼兼が城を傾け。下はほちやくのお千代。折介が鼻を傾く。都戀に上  
 下の隔なし。況賣色に於をや。中三の生る島もなく。川岸妓の釣る池も  
 なく。その流れの源は一ツなり。されは金欄の夜着も。煎餅の蒲團も。  
 寢て見る夢に差別なし。今や一個の通子あつて。青樓の西岸に遊び。閨  
 中の少婦が。愁を知らざるを志る。予其趣を一帖に述。初に武左と素見  
 の二篇をくばえ。夷狄だも殊あることを知らしめて。四方の遊子に。南  
 廷一片をばづませんと欲云々

山東京傳述



目 録

- 武<sup>タケ</sup>左<sup>サ</sup>の初<sup>ハジメ</sup>會<sup>カワイ</sup>
- 素<sup>ス</sup>見<sup>ケン</sup>の<sup>ノ</sup>高<sup>タカ</sup>慢<sup>マン</sup>
- 西<sup>セ</sup>岸<sup>ケン</sup>の<sup>ノ</sup>世<sup>セ</sup>界<sup>カイ</sup>



京 傳 画



艶語 志羅川夜船

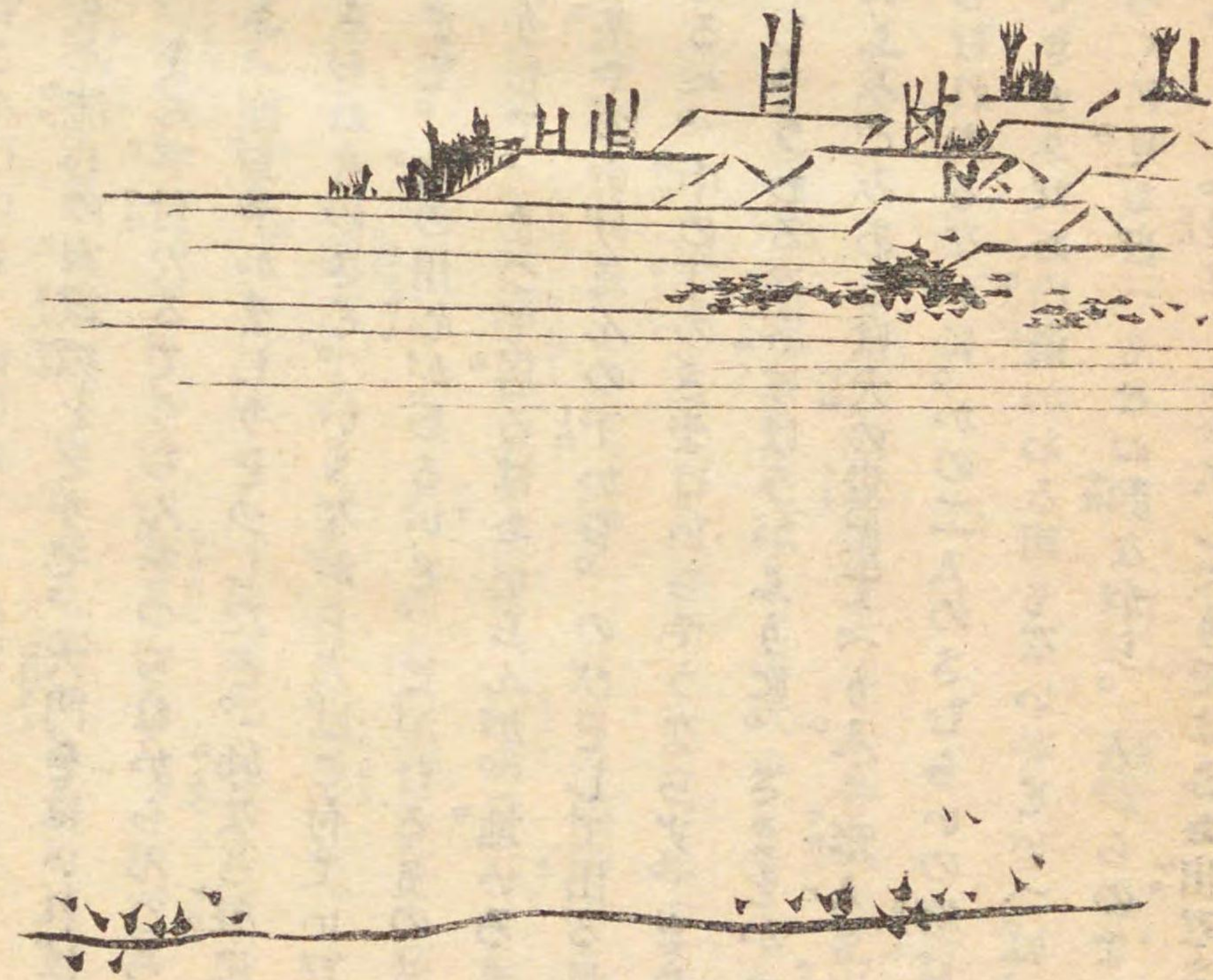
山東京傳著

〇武左の初會

人は武士なげ傾城に。きらわるゝとはいへども當世吉原の客は。七分武士にして三分町人なり。されど色里のならひなれば。ぶつさき羽織に。どう金づくりの大小しやんと小りゝしく見ゆるも又。異様なり大小と遠くねる夜も一ト盛りとは。お武家がたのむゆつくわいぞかし。此里に來ては武士のたましい。一寸もひかぬ氣になるは。戀はくせもの傾國の志るしなるべし。此客人一人は年二十五六髪おほたぶさに元結澤山に巻てゆひ。淺黄の五分長じゆばんかいき編しまのしたぎ下着。黒羽二重の小袖もへぎこはくのはいびろき。帯を四角四面にむすび。黒縮緬の綿入羽織せりしろい白糸にてべつたりと。ぬひ紋しはありの紐大小のさげをともに紫なり。一人は年五十斗りさかやき赤く。かほに白なままずできてはけまげふしほそく。かば色のじゆばん黒りうもんの小袖こもん小紋したぎの下着。とびざやの帯おなじ拾羽あり。玉むし色の茶丸ちやまるのうら。いづれも白き足袋に。なかぬきぞうりをはき。いつかどの家中志ゆと見へ。いかにも茶やあるいはやり手まわしかたの

よろこぶ客人なり。けふくわん音さんけいを。いひたてそれからそれたまりならで。はづみきつたる心をむりにおちつけ。ゑもん流しの衣紋坂えもんざかををりて。大門おほもんをはいれば茶屋の軒のきごと。七くわん音の夜とてりんぼうと。まん字付たるてうちんをつらねからんころんの駒下駄こまげに。け出しづまの八文字。お梅さんゆふべはおやかましようをつしたと。妙なる聲こゑに女房にようぼうがモシへちつとおあがりなされまし。そふなさらぬものさ。いゝながらたばこ付ていだせば。かどくちに立て居て。たばこのむも所がらとて。火の用心ようじんがわるいと。どがむるものもなし。こなたには新造しんぞう禿かぶが長くなり。みじかくなりして。まつて居るはあいらんが。地ちいろ志しにてれん茶屋へ。志しけこみしあとなるべし。犬いぬが茶ちやのわけゑんの下したから。のびをして出るでに禿かぶはびつくりし。ぬむけもこれですこしはさめたる。中の丁ちやうのさまはいちやうならず。きめづきんのぼうづはむきだしのぼうづを見みくだし。しやうわるな客きやくはほうかふりに。さまをかへすけんは地ちまわりてに。はりこまれあるは小べんにふみこみあるは犬いぬの糞くそにすべり入り來人きたいも出る人でも氣きは天上てんじやうにのぼりいろゝさまゝにうちむれたるなかに。かの二人のさむらいの客きやくは。同役どうやくの志つた人の茶ちややを目めあてにのれんを。のぞきどふだお内儀ないぎかわる事こともないかといへば。あがりはなに禿かぶの口上こうじやうをき居たる。女房にようぼう立てるたつに見みおほへもせぬ顔かほながら。人がらのよいさむらい衆しゆゆへ。なんにもせよだいな客きやくと見みてと。是こゝは久しぶりひさびさでよふお出いでなさりました。あうはさ







斗り申てありましたと。けふはじめてきた客にあわせどくなつた口上もおかしくすはるやいな  
 はや。女が盃臺もち来れば。女房は二人が大小をあづかり手あぶりかたよせて。さかづきを  
 はじめ何やら咄はわからぬと。そら笑して一ツ二ツとすゝむれば。客は志ゆうぎをするにはや  
 女房あち付顔。どこぞお心あていもござりますか。おなじみでもござりますなら。おさまひ申  
 につかはせまじやう。イヤ〜此ごろのきびしいで。うちたへ此地へ来ぬゆへ。心あてといふは  
 むかしの事。こんやあらたに妻をさだめるつもりさ。ほんでござりますかへ毛頭いつはる所なし  
 さ。左様ならもはや見世も出そろひましたらう。御見物なされませ牛介かてうちんとぼして御  
 供志やれと。あいくろ敷は此女房のトかぶモンおまちなされましと。はありのゑりを折てや  
 り。左様ならごきげんよう。内證は早くあいだすくめん。客ははや。心中そいろにおもしろく  
 鼻唄で。あちこちと見てあるけどよくこゝろ出てさらに決せされば。茶やの男我心やすき内へ  
 すゝめてあげる。客は廣ざしきにやう〜茶やの男ととも三人なれば。居所にまよひ床の間  
 の脇へ居る。女郎のすはる所なれば。茶屋のおときのごくがり。心のうちで笑ひながらもちつ  
 とこちらへお出なされませと。いどころをかへさすれば。ほどなく廻し方女郎の。たばこぼん  
 もち来つてならべ。おさだまりの盃てうしいだす。女郎のであるまで。客は大おんじやうそひる。  
 おどりたる事尾に尾を付て見えをいひ。同役の友だちと三四ねんあどに。ちよつと来た女郎や

の出をくばしく知つたかほにはなす。この座敷のやうすにて廻しかたも。やぼなきやく人と見  
 てどる。女郎もらうかを通りながら此やうすをちらりと見るゆへに。座敷へ出やうもとの外お  
 そく。まわし方にせつかれてふしやう〜。首きりばへだされるやふににべも志や〜りもな  
 き顔つき苦界の身なればこそ。かはれますといはぬ計りの顔色にて。出ながら何やらほかの女  
 郎とはなし小聲にて笑ひながら来て坐鋪へはいると。横の方むいてすはる。客は今まで高聲で。  
 はなし志たるもきゆうにそげて。との外小聲に之盃事。たばこのむにも心用ひて。何か氣ぐら  
 うになる。女郎は茶やの男にむかひ。ダイブまじめだのどうさしつた。初音いづればその尾  
 にどりつき。茶やの男すこし。あかしみをいふて。女郎をわらはせ禿をなぶりていやがらせ。  
 客の方へもいろ〜はなし志かけて見ても。とかくすこたんなあいさつ故。座しきいよ〜か  
 たくめいつてきて。客と女郎との中に一言一句のはなしもなし。客はあまりてれて手持なけれ  
 ば。れんじの障子をわけ。つれの男と大氣のうはさや。あしたの奉公の番ぐりをはなし。小聲  
 なり。茶やの男あまりきのどくさに。ちよつと内へ知らせ参りまじやうと。てうちんとぼし廻  
 しかたに頼んで出行ば。客はたのみに思ひし。茶屋の男かへれば。木から落た猿のごとく。志  
 ばらくにらめくらして居て見たか。どふもつまらさずこは〜ながら。女郎にはなし志かけてみれ  
 ど。女郎とし顔を見おはせたばかりで。返答なし扱はかはいや。此女郎二人もどる瘡かと思



へばよつほどすぎてふしやうく。に。あいと口のうちで返事したばかりに。とくものもいはれず。酒ばかりのんで居る是をとなり座敷から見れば燭臺のあかりしやうじに。うつる隅兩ばかり折くうごくやうに見へて。あふぎのをとハチく。灰吹をたたく音トンく。鼻をかむ音チンく

○素見高慢

すけん山きふう「さふしたきくど志ら菊のおなじ流れの身じやとてもコレむすこもなんぞうたはツヒエだまりんでありくと犬かほへるせむすこいかさまわつちも。幾さんの所へでも。通つてちつと唄でもならひやしやうきふう」ナニ公などは。本きやうが通だから唄を習ふよりちりからにすればいい。月見などはよし原へ行どがうてきに色ごとができるせむちりからも五秋さんはなくなるしはじめは向ひ町へ出る。今じやア天神の助八より外は。山の手にはごせへせんき「はやへもんだ。そうこふするうちモウ坂カ本トへ出る辻駕「ハイ旦那貳百で二てふめへりやすかき」二てふでよし原まで二百か駕「そんなむだをおつしやらすと。いさくさなしにめしやしき」二百ならおれもかついでゆかふ。二てふで百なら乗ふ駕「そんな事なら婿は明ねへト跡へき」だれがあんな高へ駕へ乗もんだ。二百出すと明ぼのへ行つて餘ッ程。うまひ世界がかけるむ「ほん

にわの茶漬のやぢをか心まちをして居るだらう。よりなはるかき「ナニあすこにも下りが有るからふさがりわらべだよむ」おめへ毎晩出なさるかいつでもすけんかへ「コレサ志づかにいはつせへ通りの人が聞て外聞がわるひ。昔はおれもはつた者よ。大町六十幾軒に五十軒の河岸見世。てつばうにいたる迄一軒も上らねへ内はなくて。大門を打たねばかり。起風さんといつちやア飛鳥も落るやうだつけが。すこ色事の筋から。もめ大根ができて酢のこんにやくのと。うたせるから。ぐつといたちの道にしたよ。それだによつて今夜などもあそばふとおもへば。昔そふいふ世界を書て置た。名にしをふおれが事だ。物を格子くどきの相生屋を一ばん御目にかければ。どの傾でもどつこい承知之介だけれども。それもむだな事だよ。功成名とけて身まりぞくとやらで。いつそすけん云所がありがてへよ。むすこなどもそふさつせへむすけんも歸りが難澁じやアごせへせんかき」そんならどこぞ茶屋にひける所でもあるか。あらばおれも附合つてやろふむ「サア有リア有けれどもいひにくしいつてもまよせん引ケやせんき」おきやアがれ相談が出来るかと思へば。そんならやつぱり見物素見禪てんまかむ「此みのわの内が長ひからてへくつするねへき」この先の横町といつて松葉やと丁子屋の別そうが。むかふ合て居るをれが大名だど。爰をぐつと縫上ケをさせるよむ「アノ何はあめへき」コレ明ぼの、前たかくれて通らつせへぞて今見付た様子じやアねへかむ「ナニ誰も見へなんだき」ヨシく時公に素見の通をおしえ



て置ふ。まづ第一五丁まちをそゝるにさどるやつは。まわりやうが悪ひから同じ町を二度も三度も通らねへければ。それならねへは所をやらうが案じやしたアレからひんそろにぐつと伏見丁の。下直な所を見るはヨシカ。それから二丁目を下モから上ミへ見てすぐに江戸町へはいりやすソレよしか。それからけつまづかねへやうに西川岸をつゝ切つて京町そゝりの新町へ来て。それから羅しやうもん川岸を通つて。角町を打留メにして中の町へ出て。犬のくそのなひはし通りを通つて歸る何ノと。おそろかん志んだろふむすこあやまつたかむきついもんでござへすきかふいつちやア鹽ざるをどこへ置いて来たといふやうだが。かうまんでも髭なでいもねへがすけんではマア日本一の通だヨマアいつたら見さつせへソレ傾が見世に居る癖をいつて聞かしゃう。まづ小ざらしが三絃を弾く。御射山がくさぞうしを見る。玉かづらがはりひぢ。松人が立てひぎ。深山が琴を志らべる。瀬山が多をか。七越がきせるを通す。扇野か耳こすり。かたち野が火いぢり。其外まじり小見世まで。だれは志やくをおさえる新造の。だれはいねむつて居る。こんなこつちやアねへ。つがもなくそれく穴があるけれども一ツ朝一ツ夕ははなされねへ。ならうとおもわばちらが内へちよくくさつせへむいつでもおめへ留主だからむだを由はなれ西川岸の二のいで。獸みだれ鳥口舌志た夜のきぬくはきあすこはどこだと思ふ。西河岸さきあれが二々晩三ばん連れて来た。かうてきに通になつたのむこからゆか

れるとよつ程近ひねき爰はめへど牽牛七といふやつが。切られた所だそれから番小家がでたむ何んだかおかしな匂ひがするねへきム、又小つか原でやくそふだ。鼻へせんをかわつせへ此匂ひがすると。爰は降りたがるよむそこいらは歸る身では案じはねへヨキソレその刀々二本があやまる大門へは一本ンではいらつせへむホンニ今忠五郎が所か。つんぼうが處へでも。あづけりやアよかつたきそれも我方寸の内でありさ。此笹の中へかくして置がいむひよつと人がきナニサ志るもんだそこが。まだやぼだちらも無刀に成つてはいるよ。人はこねへか氣をつけさつせへむヨシくサアこれで腰がかるく成つたコウ彌八玉やの志ん造にとんだ。いきなたてひきの有りさうなやつがある。こんやもいれはいが。いつもく建具やのかるこを見るやうに。格子ばかり志よつてるよむおつな所に本屋が有るのきこれはげいしやの駒次が内だ。この格子が松葉やの別家だ火事の時分はみんな女郎がこゝにいたむまぢねへこゝでちよつとき小便なら奥田のわきがい。そして公と羽ありを取かへてきよふおれがのはあんまりだてだから。夕べの人がまた来たど直に格子さきに目につくむこんやは賑だねきマアいそがつと衣紋でもつくりの。いかに傾城買といふつらで大やうに大門をはいるがいト二人は大ものうちへはいりけるが。出入の志げきにまぎれて。見うしなひその後を志らす



〇西岸世界

いづくが鬼の宿とさだめん。よし原の假宅もおのか住家にかへれば。焼土にはへし。べんぐ草もすがしきの音にのみ残り。材木の間に鳴しこうるぎもむかふの人とよぶと鳥おぼつかなくも。只ひとり藏のさしかけに夜ばんせし若者も。はやきん／＼せんたるかほつき壁土の山にひきさき紙の目印つけしも跡方なく。大工のはまりしどぶもふたができ。ひの木がかほる新宅のはんじやう。五町のにぎはひむかしに百倍せり。げにやけぼこりとは此ことなるべし大町の家々はいふにおよばず。西川岸の夜見世も中洲兩國のうそさむきに引かへて女郎のかほつきにもはや。よし原のおもむきあらはるゝぞかし「西行いかにとありければ。どれ／＼／＼のそきをつかうらさんどふした。へんな顔をして居るぜ。中洲よりさむくなくつていゝの。志かし四ツ竹ぶしがきかれぬへでわるからう女郎」だれだ徳さんか。どふりできいたやうな聲でをした。でへぶ遠くからきなんすねそり「こはたの里に馬はあれどサ女郎」君をおもへばかへちくしやうめおばさんによくいつてくんなんしそり」をつとのみこみ山ぞくらかな女郎「ありやアどこのかむすこだつけね女郎」ソレサ中洲のきりやのむすこ女郎「そふ／＼あのどをい所からよくきんすねいゝこんだね女郎」いろでもあるであつしやう女郎「物づきだね」

三人はまたさきを見物する

月ものにて名は源一人は田まちものに政「こゝをちとみやうハ、アあもしろ狸だは」源「こつちらの火いぢりをして居る。女郎はひてへをかなづちで二ツほどくらはせると大橋のお今といふはたけたせ政」をぎやのあふぎ尾さんをすぎがへし「すつたといふくびだ久」ありやアえもとやの半がめへとなじみさ源「こゝへあがりはどふだ政」あらアあやまらう久「なぜ／＼政」今夜はうらだから南一いてへそふいふどがは志ねへ久「そんなら此ぢうのばんあがつたな。おらをはすしはうらみだせ源」それじゃア相談がでさねへサアそんなら早くどこへでもきめて。あがらう。すこはらがきたの、天神だ久「さむしいやつさほんに早くあがるがいゝのさ又ひけをうつとまごつきてうちんだ政」いつそめうつりがしてきたのう「京町の書やくきかゝる書やく」政公とふだチ久兵衛さんもちぞか戀には身をやつすの政「モシきん猫のおなじみはどふだねこつちへきたらう。ゆしまのがけからもいゝのがきたそふだ書」そふだ役年のらくじやうがあるのに賣女がきたからいそがしくつてならねへ久「モシこのごろのまきはだこんだね書」あげや町の山豆さ久「だがかちやした書」ばたはわつちがどつたがあくがいゝ句さまわたでくびといふだいでくる宿できせるをほめられといふ句さ久「よくしたねへ政」なる程といつアまわたでくびだらう

政「かく久」なぜかくれる政「かけがよらねへでこまりきるわな丁子やなぞはりやうけんづよいからなをきのどくだ」此さわぎて書やくさわかれ源「サアこゝへあがらう／＼さむくつてならねへ久」あが



るがいに、トうちへはいり政はきものをもつてあかりをふにする 若者「おはきものはとつちへ政、ホイ客人をあくつて大見世へいつたくせがうせぬへいま、しい久しやうをあらはすの若者、おみたてなされまし三人はしこ見たて女郎あれ久しおもしろ」ト二かいへあがる川岸みせはらうかも 若「マアちよつとこにお出なすつてくださりましト三疊敷のまわし座敷へ三人ながら立てぬて」政「どうぎにやけ穴あなのある疊たたみどうらくもの、布子を見るやうだ源、おきごたつでねわすれたのさマ、まだ大井がでさぬへをうばく宗の本堂のやうだぜわかいものは女からかみの中ばりは丹々奈羅ろくしやう」政「此からかみはよりかね公御入といふ道具だてだわかいものは女でつけたてにかいたたつた川の畫」ト三人をいりて下へゆく 政「これは書おきをよまうといふあんどんだねといふかきたて」若「サアこちらへ」ト三人をいりて下へゆく 政「これは書おきをよまうといふあんどんだねといふつけすとひやうしまくだ源、何か書てあるぜ久」ナンダ「二朱出して海瀬あしかをかひに北の里、源、い、い、とんだぬられたとみへる久兵衛もし戸棚にあ」久「ウ、上の紋は丸に五本ぼねの日の丸扇下が五三の桐といつはひねつたもんだ三味せんぼりのおやしきかのよもやそふじやアあるめへ角丁の花山名順さんのもんだトふたをなればはしがみ一ツつほぶしのほそ一本くろもトのやうに五六本ある」此はしがみのうはがきは惣兵衛ハ、アきこへやしたこりやア、齋澤丁川岸のふるぎやのばんどうだも志れぬへ政「こいつア露しやうと書てあるわかりやしたこりやア大をん寺めへのあけぼのからくる客だらう、源、あけぼのきやくは百六ツ久」アわりい、ろしやうおしやアそんなねがでるトむだくちん、に用だんすの下の 政「これよさつせへそのひきだしにやアかたずみがあるぜトいふゆへ下のうすいひきだしをあけてみればさりのまのびいごるのくま手一本。田まぢのちたん扇がうや

トトかい。まんきん丹一ト包長ぶきのや久 マア都鳥の、くわんがある山トひらげは 政「もつてへねへよさう、わゆる紙さ小づかひ錢かげ一ツふく」ト包長ぶきのや久 マア都鳥の、くわんがある山トひらげは 政「もつてへねへよさつせへわりひしやれだうへにあるごなべをあけてみればつべたくなつたあ」政「まんざらでもねへ」久「一ツつまんて」こいつアつめてへ政「もうよさつせへわかいもの。しよ」若「こんばんはだいぶおさむうござります久」どふだへにぎやかかへ若「あまりにぎやかでもござりませんが中洲は宿ちんが高イからどふでもこつちがわりがようござります源、こんなアみたやうだ角トのつたやにいやア志ねへか若「へい、いへ大三屋にありましたをくのほうをほうの子まよくはな歌て」若「此がきやアぞんざいなお客人のござるに久、ぞうりだしてはうきなめにあわせるみなく、わらふわかいもの」政「これてめへのひへはなをつたか久、なんだこんのたびだなひねつたもんだソレてめへのせなかに大きなかさきがある、こトよく」コリヤアねみせびらきの時せいろうのすみへひつかけてやぶりいしたよもつこも此トよくは折ふし小づかひせにをぬすんで久」おらア又かけ清が切りやぶつて出た穴かと思つたわかしをわいぐひしてね小べんをたれるくせあるべし」久「おらア又かけ清が切りやぶつて出た穴かと思つた源、コレなにをいわつしやる、こトよく」ばからしいト下へゆくわかいものおきたまりの通り」若「あ一ツをあげりなされまし源、これおぢいどんこんたにたのみがあるぜ彌八玉やのむかふうらのかみゆひの庄介が所のぞうりにかつて来てくだせへそしての水戸尻の相生やそげをあつらへてきてくだせへそれたのみますト南一なげ出す兩方、南一ではわかいもの」若「かしこまりましたト」サアみなんお出なせへ三人のわいかた女郎出る先へいづるは花代まで甘三三みへてかほたくましく人のわるさうな女郎これほもおた」びからさられてきてやくねんをこへかわれるもちるんきやくこり之業のよほごきたきんしのすれたぬひもやうの



うちかけもん三久「ヤア丁子やのおいらんこちらへトあくてんをいふつきに出るは月の戸さ云まわり女郎さしはるはまいする」  
 びんへつうのまトなひのかみをはり松ぼのかんざしへゆびのわをさふしてさし小袖は政「ハ、ア梅ばちの御紋は當おなんどかあい鼠かあさぎかまねなくよこれたちりめんトの小袖もん所はきんして梅ばち」  
 世だわつちがふんどしと同木同作だそのあさは雪のさ云ふりそでしんぞう大みせのまきせのなが 源「おめへはまげへまち人をかけたの可愛らしい子だ茲へきな 政「此子はひなづるさんの所のつるしによくにているねへ 源「サアでへぶせまくなつてきたおめへがたはあんまりそつちへよると舟がかしぐによ三八女郎ほくくくトわらふ源は一ばんめの女郎久兵衛は二ばんめ政はふりそでさ 源「げびぞうはまんざらでもねへす久なる程よく食たがる人だ政「げこをあらはすねそでゆきの「わつちがもつてあげんしやうトめしをも 源「これははかりの山櫻雪ぬしはへ政「ちらア飯はあやまらう酒をのんだらちどのぼせてきたトおもてのれホ、ウあしたも天氣はよしのくず 源「こつちはかんざらしになる志めさつせへさむいぜくく月の戸ゆふべも此あてだ狐火がもゑんした 久「れいこくがにほつてわりい志めるがいへトいふ所トよく「モシへちつとおくんなんしト酒を茶づけちやわんについてゆく久「サアおもしれへくモシおめへがたちつとおあがり花代「おかたじけなふおすがたべんすめへ 源「此そぼを一せんこれはそつちでくはつせへトぶつかけのニツのつた若「これはありがたふござりますト此うトくもやうあつ若「ちとかたづけましやう久「そいらもよからう 行源ト久は小べん所で小ごゑに 久「モシおめ

への女郎のくびははなせそうだね 源「わるい色の女郎だなんでもやまひがあるよ早くためですねがへばい久うさアねへトこめをさげ三人の床おさまりはやひけをうついきせきはなトみの「おめへよくきてくんなんしたねおそいからきなんせんかと思つたヨ 客「こんやはあいにくにきやく人のまめがあつてぜんてへこれねへ所だが今松ばやをおさめるとぞきにきた女郎「おめへもつてきたのばてうちんか 客「扇やに七ツのむかいがあるからすぐこつからむかひにいつてうちねかかほをするつもりでかんばんでうちんをもつてきたそこらへをいてくりヤアなげ出しさし 源「花代がの内にはな 久「ねどうぐがだいぶりつばだねへや持だけありやすまかし三ツぶどんとはちどつよすぎるねドレうへのふどんがひじりめん縮緬中がもへぎ下があさぎべちやアねへおめへここの餅といふものだ源「まくらをみねへ金もんがまだあかくならねへひきこしにかつたと見へるトひきた「何かこんたんの灸があるこいつアおもしれへトひらきおきヤアがれきやく帳だ 久「そのあいだにまだ何かある源「こいつはたしかにいろ灸だトあけてみればそんばア、トいふ所へ政小政「おれひとこり大よいだトよぎふさんチ、こいつは大わらいだト久公此ふどんを志つてるか久「ふくく、そふいやアどふかみたやうだ 政「ソレ尾田木をつま川さんがぶんさんにだしたやうだ志かもおらが所の客人がしてやつたのだ久「ウ、そふだく 源「ほんにかこれもい、此やぐもこへくらがへしてははたらきのねへやぐだ政「ちらアもふね松やぶかうじとしやうト手まへのさこへいつてみればト代月の戸雪の三人をききたつにあたつて











工本 44

明治廿六年十二月廿五日印刷發行  
明治卅五年九月廿二日三版發行

定價金六拾錢

版權所有

編輯者兼

大橋新太郎

印刷者

木村榮吉

印刷所

英文社

東京市日本橋區本町三丁目

發兌元

博文館



